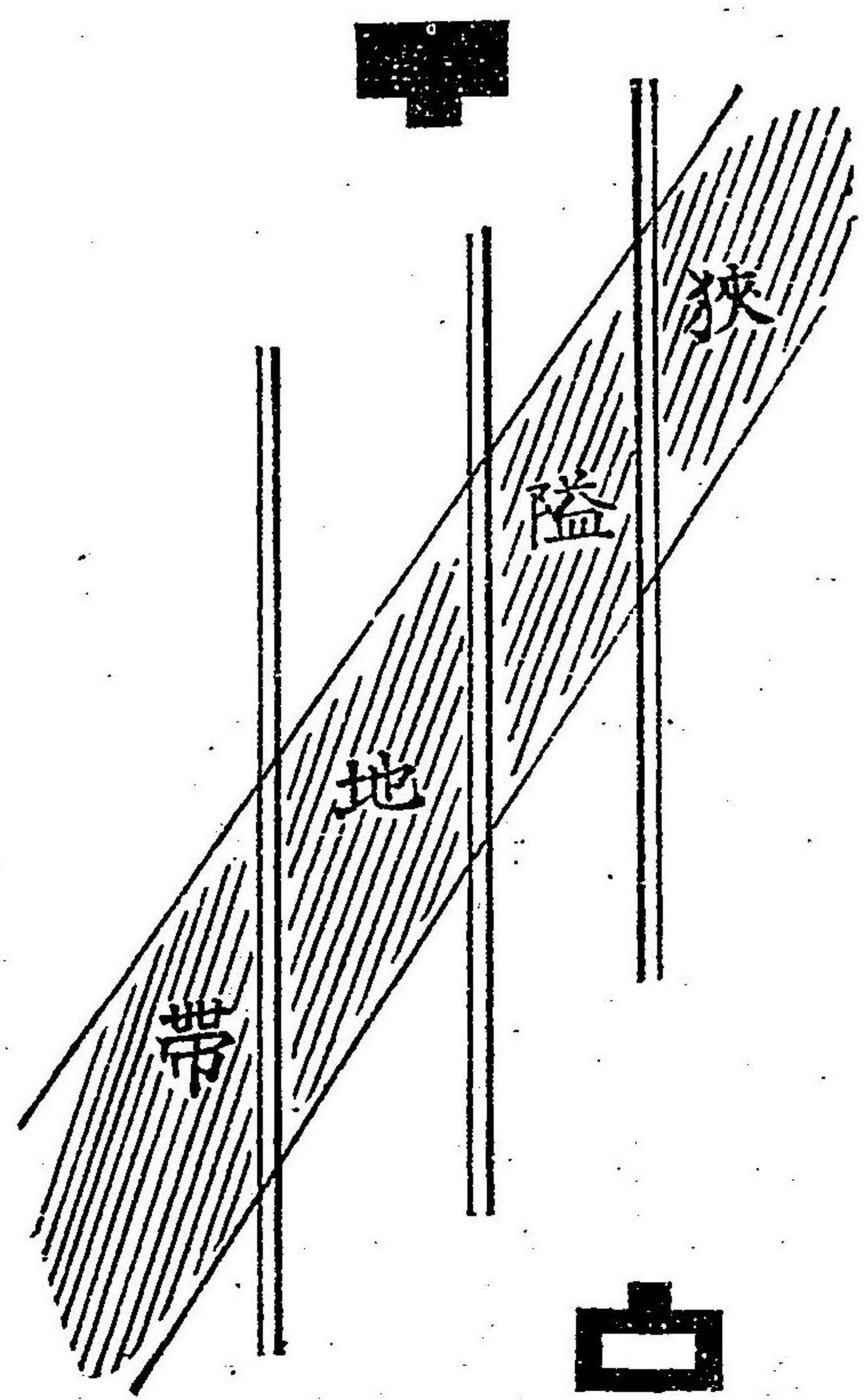


協力を計るがよい此際横方向に於ける接膚的協力をする必要はない否無いのではない不可能なのである之れ一般に此の如き山地より成る狹隘地帯の特性として兵家の唱へて居る所でありて之れは正論である

右は敵との衝突と云ふことを眼目とした説であるが之を加味せざれば一縦隊がよいかとの間は起るが之れは亦決して然りし云ふを得ぬ何者戦備を取らざる行軍は如何に實行すべきやは野外要務令が教へて居る師團の如き大部隊は無論此要旨を適用せねばならぬ殊に山地は住民地少なく宿營給養の便を得ることが出来兼ねるから益々其必要がある然らば敵情はありても無きても同様に非ずやと思はるゝが夫れは又大に異なる即ち前者は戦闘を基として分進し後者は休養を主として區分するからである

e、北軍師團は如何に縦隊區分をなすべきや
 之れは空には決せられぬ確固たる論據なくてはならぬ之れが爲めには先以て各狹隘の觀察をなすを要する其判断は次の如し

其一、狹隘地帯の概観



狹隘地帯大體の方向は東北より西南に向ふて居る而して此方向は我採らんとする進路に斜交して居るここ、此方向に隨て該地帯内を流るゝ菊池川のあることゝに

は先以て着意せねばならぬ要件である此に因りて各狹隘方面の價値に相違を來す

狹隘地帯を速かに通過し終り而かも敵に最も遠き地に於て此障礙を進出するを得且つ菊池川の線には其障礙の程度小なる可しと判斷せらるゝ上流に於て達し又山鹿附近は先づ辛ふじて師團を展開せられるを得然れども山鹿の狹隘以北に於ては殆んど全くの狹隘口にして他方面への交通路の求む可きものなし

第一道に特有せる有利なる點に優る點は一つもなし

然れども第一道の唯一の不利とする點は此

其二、第一道方面

其二、第二道方面

道上に於ては大に便利なり即ち諏訪川上流は關川河谷を以て西方の諸道に連絡し得可く尙菊池川に近づきては小原及坂下よりは左右兩道方面に放線狀に走なる通路を有するは此狹隘内に在りても大に兵力運用上の便るの利を提供するものである

此二道は敵に最も近く植木以南に至りて初めて狹隘地帯を進出し終るべく又菊池川の障礙力最も大なる部分に向ふものをなれば例へ諏訪川及菊池川河畔に於ける地域の比較的廣大なるものあるも再び敵に近く熊之岳、金峯山の山麓に於ては其効力を消滅せらるべきを以て最も値少き道路とす

其三、第三道方面

第四道方面

三、師團區署の要旨如何

以上の比較觀察によれば北軍師團の爲め各道方面の供有する價值左の如し

第一道 狹隘地帯進出方面としては第一位に位するも内部の地勢全く行動の自由を欠くは主力を達するの地に非ず

第二道 進出方向としては第一道に劣るも各道の間中に位し且つ内部には兩方面に向ひ適當なる交通線を有し兵力運用の自由を與ふるは多少の不便を忍ぶも主力を進むるに適す

第三道 最も不利の地に於て敵に到着し又河川の障礙最も大なる部を通過しあるは決して大部隊を進むべきの地に非ず然れども敵に取りては近

第四道

く柳川方面に出で得る方向なる故警戒の爲めには輕す可き方面に非ず

右により師團は概ね次の基準により區署せられ南下の途に就りか適當であらう

第一道方面 混成聯隊

第二道方面 師團主力

第三道方面 歩兵一大隊

騎兵 聯隊 主力を以て第二道方面より但し進出後は山鹿方向に退路を取り北方より南方に向ひ動作す

第五想定

(二十萬分一熊本、三萬分一植木、高瀬)

一、南方より熊本に向ひ集中中なる南軍は一混成旅團を植木附

近に派遣す其任務は菊地川左岸の地區に於て久留米平地より南下せんとする敵の前進を妨害するに在り

二混成旅團は方保田(山鹿東南)用水(江田東方)并に水葉の各狹隘に占領部隊を差遣し且つ菊地川の諸渡過點を破壊し以て各方面の防禦に任せしむ

三木葉狹隘占領部隊の編組左の如し

歩兵二大隊(機關係四銃)騎兵一分隊、山砲兵一中隊、工兵一小隊

問題

木葉狹隘占領部隊長の地形判斷

注意 三ノ岳西方斜面にある織葉樹林は、八嘉村南方地區并に山北村東方地區以南に在りては密林にして下草多く所謂殆ど部隊として利用し可べらざる蔭蔽地帯なりとす

研究

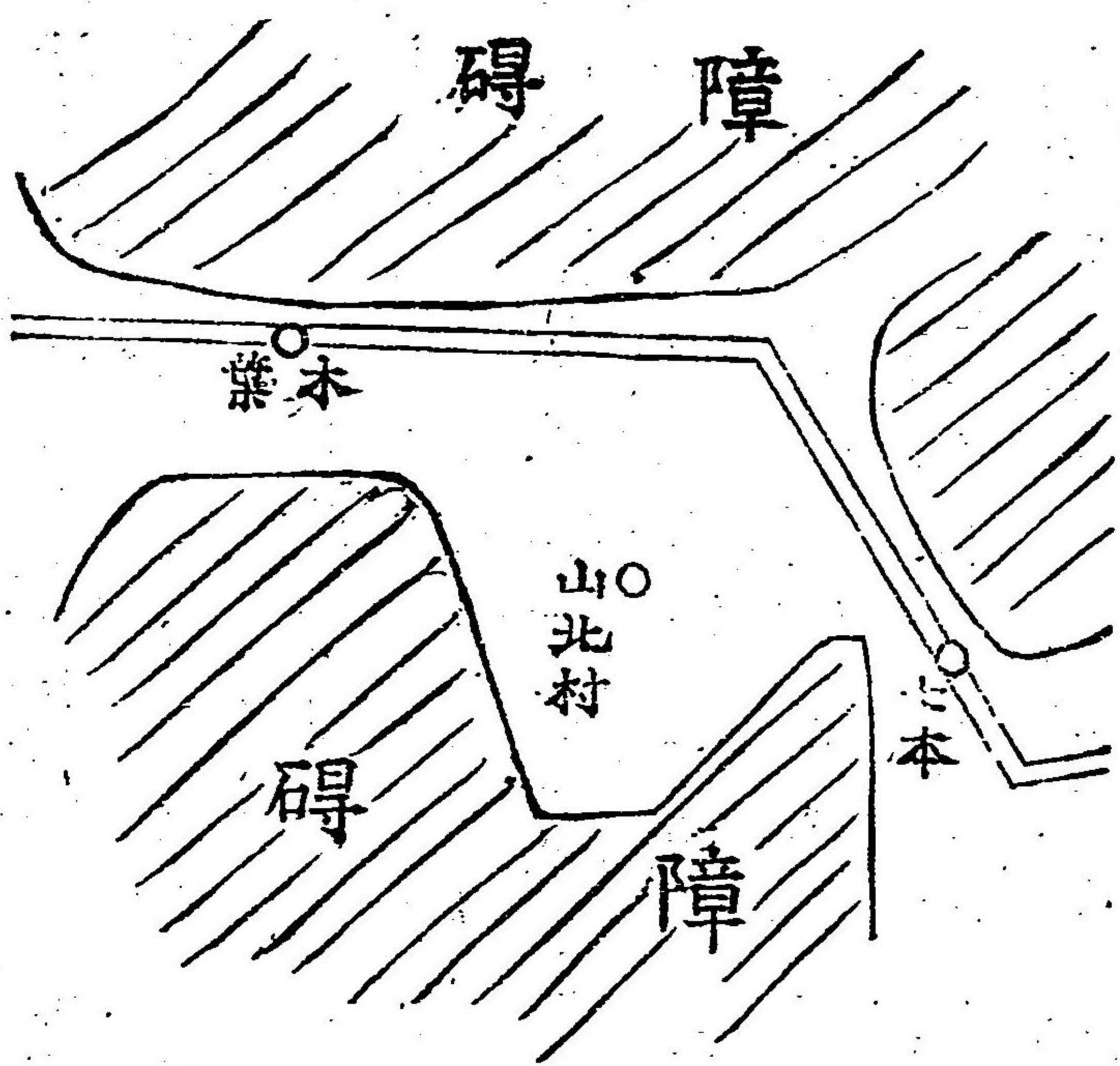
一占領部隊の戰闘目的は?

決戦は無論其目的でなく持久の戰闘を主とするものである故に地形の撰擇利用に重きを置かねばならぬ之れが爲め難攻不落の地形あらば元より一陣地に於てする頑強なる抵抗により目的を達し得るから最も好都合であるが然らざれば數個の陣地により所謂逐次の抗戦により時間の餘裕を得る如く計畫するを至當とする依て此考を基礎として地形の判斷に臨むことが必要である

二地形大體の觀察は?

木葉狹隘は木葉、國見、金比羅山と三ノ岳との中間に在る所謂長狹隘である而て其幅員は谷底の中員は僅々數百米突にして千米突に上らぬが軍隊の行動を許す地域はと云へば約二千米突内外ある而して木葉の西方伊倉町北方地區になると大

に濶大となり又狹隘の中部木葉の東南山北村北方地區は又
澎張せられて居る又谷岸即ち道路の通じある部の兩側に就て



云へば北は急なる山脚近く迫り
南は分列せる小谷地三ノ岳の脚
部によりて成形せられ比較的緩
斜面を以て連なりて居る故に之
を略示すれば上の如くである
右により歩兵一大隊を基幹とせ
る占領部隊の爲めには全く此狹
隘を閉鎖すると云ふことは難い
故逐次抵抗の策を講ずるを要す
る而して其抵抗の位置は可成狹窄せられたる部分でなければならぬ何者廣き所は所謂兵力不相應の陣地となるか

らであるから敵が各所に其欠點を利用し得るからである

三、占領部隊は其陣地を如何に撰定す可きや

以上地形の概観によると占領部隊が木葉より西方の濶大せる地域に出づると山北村北方附近の比較的開大せる部に位置するとは共に得策に非ず故に第一の陣地を木葉附近に又退いては七本附近狹隘の端末に第二の陣地を撰定するとは共に反論の餘地なきものであらう

而して其配兵法の如きも谷底兩側の地勢より自然に決定せられる即ち南岸は運動の餘地大なる故此方に主力を置き北岸は地域小にして高き故小數の歩兵にて足り砲兵陣地は此關係よりして當然先づ北岸に於て撰まるゝを至當とす然れども此關係は七本附近に於ては適用し得ない何者七本附近に至れば進路は谷底より上りて植木の臺上に通じて來るか

らである

四右により占領部隊の爲めの地形判断は次の如くである

判 決

木葉狹隘占領部隊は逐次の抵抗により敵の前進を遲滞せしむる目的を以て其第一陣地を木葉附近に第二陣地を七本西北附近に撰定せらるるを要す

理 由

一、占領部隊の陣地は木葉附近—七本附近間に於て撰定せらるるを要す何者稻佐(木葉西方)以西伊倉町北方地區は濶大しありて狹隘をなさず従て小兵を以てする守勢行動に適せず又七本以東に至りては旅團主力に近く占領部隊の單獨行動す可き範圍外に屬しあればなり(單獨ニテハ戰闘セズト云フニ非ズ之レ情況ハ何事ヲ要求スルヤモ知レザレバナリ)

二、木葉狹隘は谷底の巾員僅々數百米突に過ぎぢれども其南岸

は行動し得可き地域を有し山北村北方附近最も廣く木葉東南最も狹く而して七本西北附近は此狹隘の端末をなす其最狹の部に於て尙千五六十米突餘の巾を有す故に此狹隘内の占領には主として谷底兩岸の地に兵の配備をなすを要するにより兵力小なる占領部隊を以てしては一陣地により至堅の配備をなし能はざるを以て逐次の抗戰をなすの策を採るを至當とす

三、爲之木葉西方を以て第一陣地とし七本西北附近を第二の陣地と豫定するを可とす何者前者は敵の爲め狹隘の入口に當り兩側に運動至難の障礙(木葉山及八嘉山南方森林地帯)を有し後者は狹隘の突き當りにして而かも一方山北村東方山林の障礙と本道方面は多兵の展開に便ならざる錯雜狹窄の地區なればなり而して其配備は甲には本道南岸を主とし乙に

は本道本面に重きを置くを要す

四、右により各陣地の配備は次の如くなるを要す

一、木葉方面の陣地

歩兵一大隊、(機關銃二を附す)古閑及開野の高地稜線

但し一部隊を伊倉町より野邊田新屋敷に通す

る道路に出さしむ

同 二中隊、(同右)稻佐及其北方にて西方に對し且古閑

野の隊の側防

但し一部隊を當初安樂寺の高地に出す

砲兵 中隊、山口北方斷崖の東方附近

歩兵二中隊、豫備隊として木葉停車場附近

但し一中隊は當初の伊倉町西北約二千五百米

突^{84.8°}附近に出す

二、七本西北方面陣地

歩兵中隊、五郎山(鐵道西側)南方栗高^{143.0}及其西北突出部

にて西安寺、栗山方向并に瓜生田谷地の側對

歩兵一大隊、(機關銃隊を附す)本道附近^{△98.6}北方小谷地の

南岸

歩兵一中隊、鹿本市ノ尾北方^{138.8}附近にて小畑、迎原方向

に對し

砲兵 中隊、^{△98.8}の南方閉圍曲線の高地

歩兵二中隊、七本附近

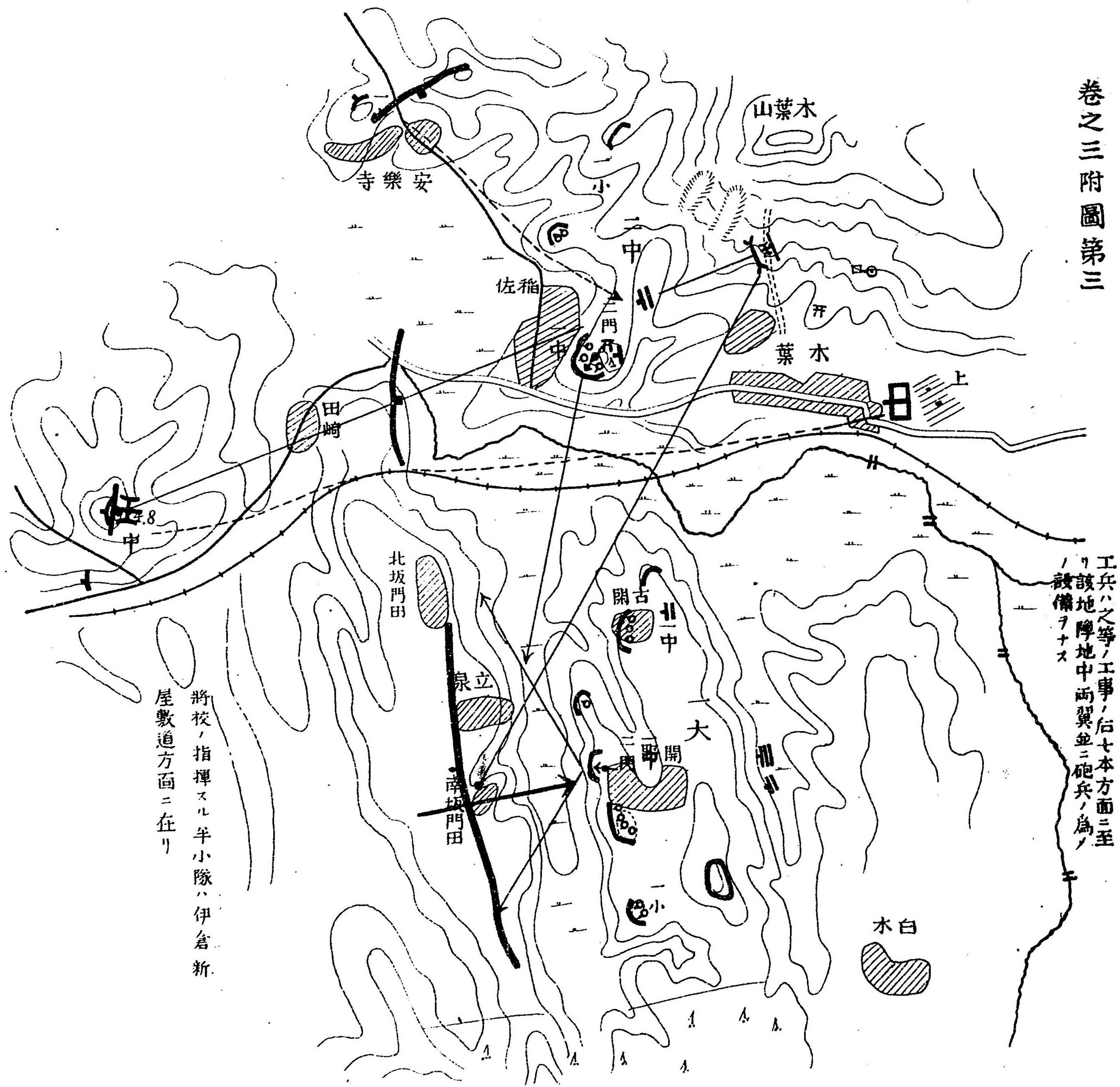
吉次越及び其北方鞍部に一小部隊を出す前の如し

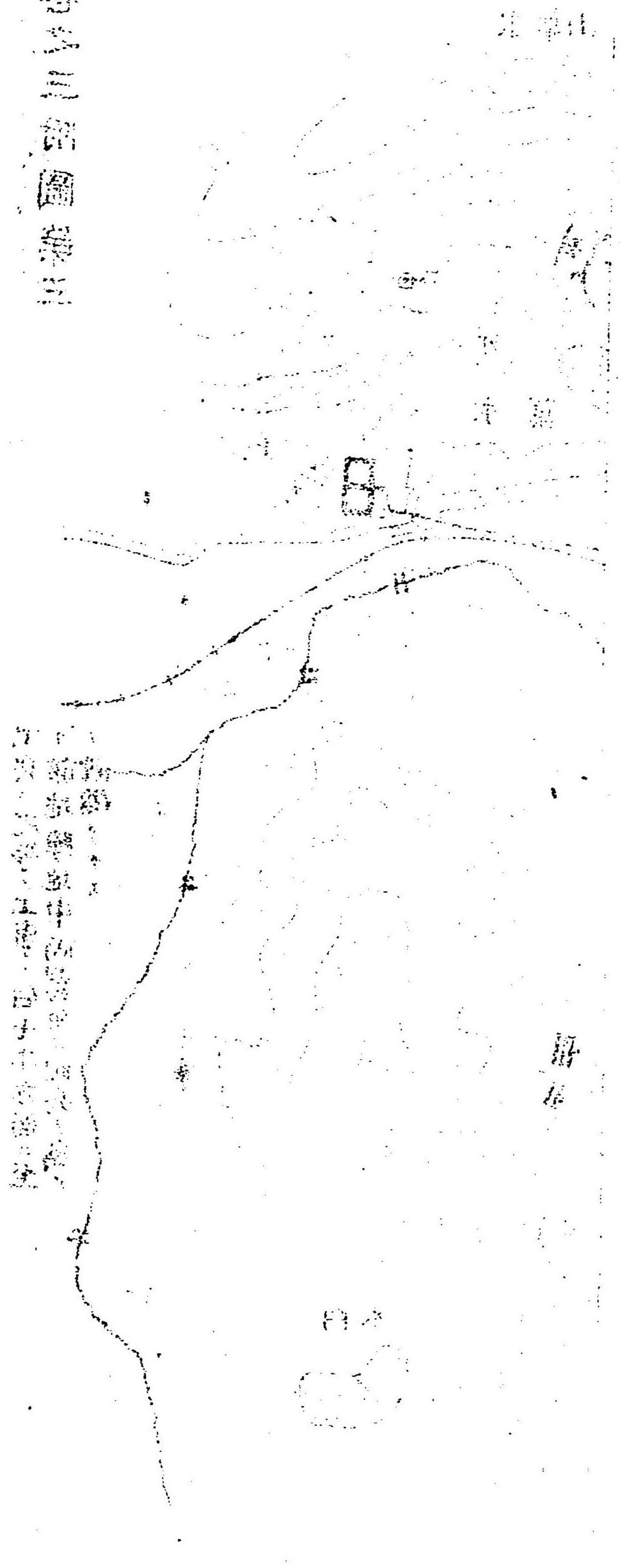
情 況

a 日拂曉敵は江田、高瀬の兩方面より共に菊池川を渡り前進す
木葉占領部隊は優勢なる敵の攻撃を受けしも此日正午頃よ

り旅團主力は用水狹隘方面の急に趣きし爲め極力當面の敵
 を拒支し數回閑野及稻佐に向てする敵の突撃を撃退し日没
 に至れり
 同時旅團長より左の通報に接す
 旅團は方保田の部隊を合し用水狹隘に侵入せし敵を攻撃
 し之を菊池川河畔に撃退せり
 敵の一部は菊池川左岸に其大部は木葉山西麓より菊池川
 左岸を南方に退却せり
 旅團は江田附近の部隊を残し今夜合里附近に宿營し明日
 午前に熊本より植木に送らるべき増加部隊と合し貴官の
 方面より進出せんとする敵と植木の狹隘口附近に於て決
 戦せんとす
 貴官は適時其陣地を撤して狹隘出口附近に敵を誘致し旅

卷之三附圖第三





團の行動を容易ならしむ可し

問題

木葉占領部隊長の情況判断

研究

一、何時退却す可きや

今日は苦戦し又敗敵と雖も前面には敵の兵力増加したる可きを以て此上は一刻も危険の位置に居らぬが宜い故に日没後直ちに退却に就く可しである。但し此際一小部隊により敵と觸接を保持せしむること、金比羅山より内の方に通ずる山路に斥候を出すの要がある

二、如何なる要求ある地を目標とするや

此退却目標の決定に出來たならば本問題は全く解決せられた者と云ふて宜しい。茲に所謂退却目標とは退却指揮の要

件たる隊伍整頓の爲めにする目票ではない旅團長の訓令に基つきて木葉狹隘占領部隊の爾後の作戰上の目票である此目票は斯く重要なものであるにより旅團長より之を指示するが寧ろ至當であるかも知れぬが之れは研究以外であるから今は想定に基つきて論究することゝしやう

此目票の決定は旅團の戰鬪目的に基礎を置かねばならぬ直言すれば旅團の豫期する決戦場の附近である可きは勿論其決戦を都合よく實行せしむる様に位置することが骨子となる然り而して旅團の目的が決戦なるにより占領部隊の戰鬪目的亦夫れであるかと問へて然りと答ふることは出來ない何者占領部隊單獨にて決戦に至る如きは此際最も慎まざる可からざればなり

右により占領部隊が明日の爲め位置すべきは

- 1、 旅團の決戦し得る地の近傍にして
 - 2、 隨時攻勢に轉じ得る地なると同時に
 - 3、 旅團が決戦に來る迄は己れ決戦に陥るに至らず
- と云ふ要求ある地なり約言すれば
植。木。西。方。狹。隘。口。附。近。に。し。て。攻。勢。に。轉。じ。得。る。待。久。的。陣。地。
を。目。票。と。す。る。を。要。す。る。の。で。あ。る。

三、前項の要求を具備しある陣地の探求

旅團の決戦場は狹隘口附近と云ふのであるから充分ではないが七本、植木の間撰まるゝであらう

然らば先きに豫定せる第二陣地なるものは決戦場の近傍で待久に適するから可ならんと思はるゝも之れは目下の變化したる新情況の爲めには利用し得られざるものである何者此陣地は前地も側地も決戦行動には不適當なる故例へ敵を

支へて旅團を待ち得たりとするも旅團の目的の爲めには更に敵を七本附近の臺上に出でしむる爲め退却せねばならぬ決戦を眼前に控へて之れを全く反對の退却行動をなすが如きは例へ誤りなく實行し得るとするも決して兵家の採るべき策ではあるまい何者は失敗の原は不測の邊より發するに謂はんや失敗の一部を現に演ずる(例へ隨意とするも)に於ておや戰闘は單簡なるもの能く成功を奏すと謂ふを知り得ては益々以て非認せざるべからざるものである

諸決戦直前に其戰場に向てする退却を避けんと欲すれば如何にすれば可なるや

と論及するに陣地探求の範圍は漸次縮小して

豫期する決戦場を後方にすることなく側面か前面に置き得る位置なるを要す

ることとなる

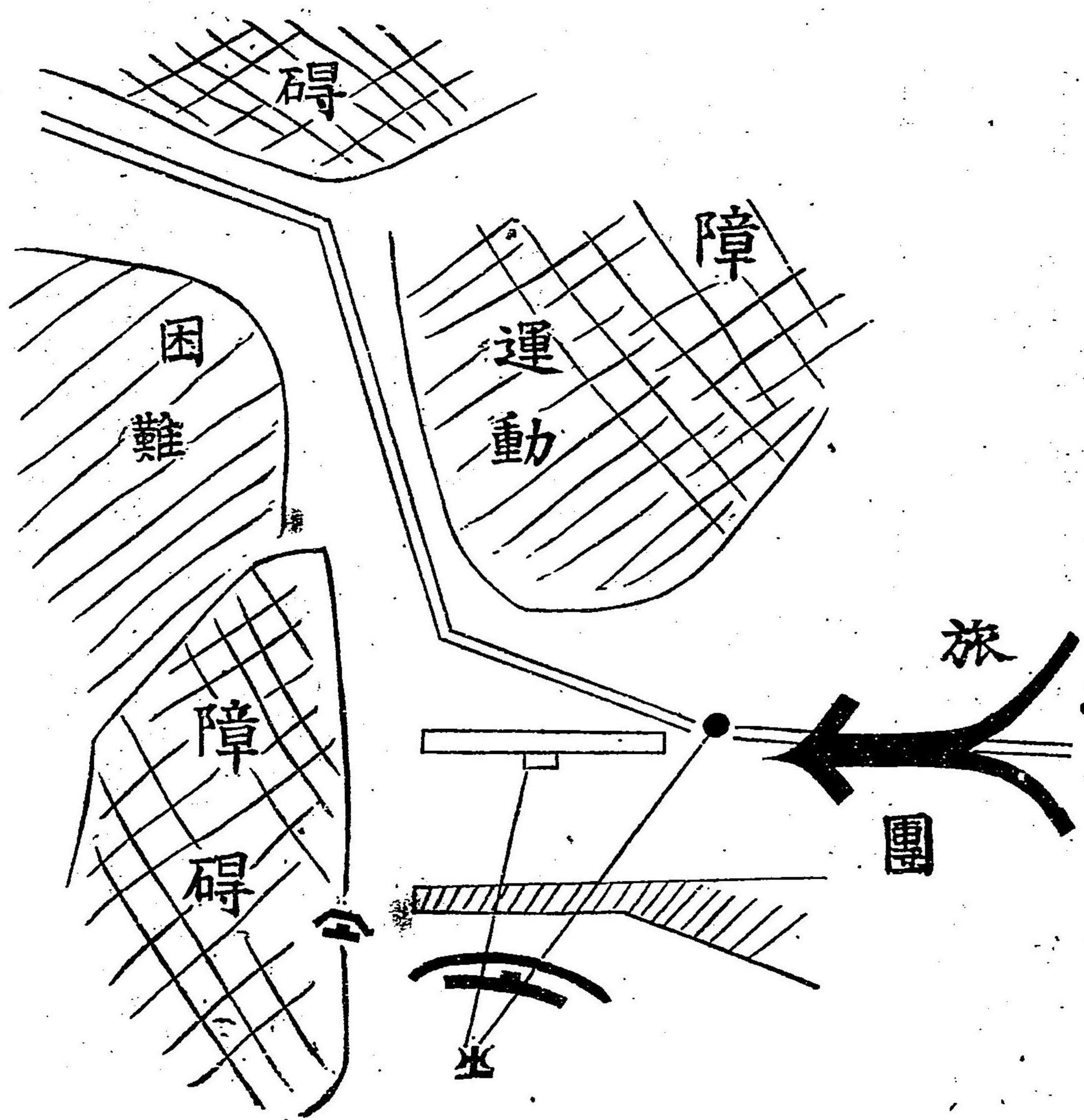
然るに七本、萩尾附近の地區を側方に置き得る陣地は無の一字にて足る

然らば之を前面にせん爲め萩野若くは植木附近に位置せんか敵の近接は容易に翼の限界はなく即ち某期間の待久に適しない

追ふて茲に至ると残るは唯一方面あるのみた七本地區の南方之れなり菱形村附近の高地之れである蓋し明日午前に於て豫期する戦況の爲め此地の適良なることは其全般の關係が次の如くなるにある

1. 破隘口に對し側面陣地をなし敵をして攻撃せざるを得ざらしむ

2. 旅團の決戦行動を敵の側面或は側背に導くを得せしむ



五四

- 3、決戦方面には現陣地より參與するを得
- 4、陣地其者は敵の前進方向の關係上危険翼は障碍たる地區により掩護せられ前地は高地として殆んど模範的性能を有し敵の接近容易な

らす其正面亦過度に延長せられず兵力に相應して有利に配備するを得

四、以上論究する所により木葉狹隘占領部隊長の情況判断は次の如くである

判 決

木葉狹隘占領部隊は更は菱形村附近に陣地を占領し以て當面の敵を狹隘口附近に牽留するを要す 之れが爲め日没後可成速かに現陣地を撤し又一部隊を田原坂附近に殘置し敵と接觸を保持せしむるを要す

理 由

- 一、占領部隊前面の敵は更は増加せられたること確實なり而して旅團長よりの訓令は最早現位置を固守するの必要なきに於ては可成速かに敵と離脱するを必要とす

二、退却して更に負擔する所の占領部隊新任務の地は之を狹隘口七本附近を制し得可く又明日旅團の決戦に先ち孤獨危険に陥る如きことなく且つ其決戦には有利に參與し得可き地なるを要す

三、之れが爲め豫て撰定しある七本西北の陣地は最早其用をなさず之れ此地は單に時を得る爲めに適するのみにして旅團決戦の地は其後方にある可きにより更に退却せざる可からざるの不利あればなり

菱形村生野東方の高地にて北面せる陣地は能く狹隘口たる七本、荻野附近の地區威に力を及ぼし敵の任意の行動を制するを得その危険の方向たる左翼は吉次越南北に亘る障礙地帯によりて掩護せられ一般に良好なる高地にして而かも其大さ亦我兵力に適應す可きを以て其堅固により以

て敵の優勢に抗す可く位置の關係并に前地の景況は將來の決戦參與を適良に實行するを得可く殊に此地は側面陣地を成形しあるにより旅團をして最も有利の方向より此戰場に到着せしめ得るの大利あるものと云ふ可し

右に依り處置の概要次の如し

一、豫備中の歩兵一中隊に機關銃二門、工兵半小隊を附し土生野に於て收容に任せしむ 此部隊は後には後衛となり田原坂に位置し敵と觸接を保持せしむる豫定

二、山砲中隊は工兵中隊と共に直ちに運動を起し又稻佐附近の歩兵部隊は古閑方面の部隊に次て運動を起し田原坂東南休居に後七本に

三、古閑、開野方面の部隊より陣地を撤し鐵道線路に沿ひ菱形村谷藪に

五、然り而して圖上研究に成る菱形村附近の陣地は明早朝附圖の如く占領せられあるを至當とするであらう

第四節 結論

一、狹隘地帯に於ける要點に就て

此事に關しては既に狹隘の特性中に其一端を述べたるも重ねて尙附言する所あらんことす

狹隘地帯に於ける地點は之を其兩端并に長狹隘に在りては其内部に之を有す然らば狹隘は全部要點なるかの如く思惟せらるゝも決して然らず之れ内部は要點と云ふを得ざればなり
元來長狹隘は兵力運用の自由を欠けるものなれば其中に於ける要點と云へば論せずとも

比較的有利に兵を使用し得る地部

卷之三附圖第四





なるや明かなり然り而して此地部は

谷地に在りては

a 谷の巾員濶大せる部

b 谷地の屈折若くは端末(衝キ當リ即チ鞍部ニ近キ)部

山地に在りては

c 鞍部及び鞍部を連続せる部

d 山稜即ち分水線

ならざる可からず即ち木葉狹隘に就て見るに稻佐南北に亘るもの并に上生野南方の如きはaに屬し田原坂若くは其東北平原本村附近の如きはbに屬するものと云ふ可くcに就ては前節に於ても之れが適例を掲げざりしも若し兵を若干用ひ得へしとすれば之を太にしては小栗峠、鷲巢山の分水嶺の如く之を小にしては吉次越南北に亘る山稜の如し然れども三池若くは田原坂方面の如く近く尙は有利に兵を使用し得る方面あるに於ては獨り此分水線、山稜のみに依頼しある

こと能はざるなり範圍此の如く擴張するに至りては要點は今や高く狭きより低く廣き方面に移りたるものと云はざる可からず是を以て山に谷あり谷亦山によりて生ずるにより作戦地全般に亘り又狹隘地帯一般の判斷をなすに當りては決して其觀察の一局面のみならざる要す

短狹隘に在りては障碍の中員小なるや或は障碍其者の程度輕易なる地部の要點なる可きは合志川河谷に於ける研究によりて明かなり

狹隘地帯兩端に要機の存することの畧説は特性の部に於て既述せしが如し蓋し此地部甲は兵力運用の自由を得乙は之を欠序しある兩者の角逐場たる可きものなれば劣勢なるものも攻勢を企圖し得可く優勢なるものも之れに信賴する能はざる危険を包藏しある可ければなり

又狹隘地帯兩端附近に於ては其障碍の景況彼我の情勢より戦術上の側面陣地的戦闘の構成せらるること屢々之れあるものとす即ち第三想定^の左縦隊が御西附近に向てする進出は右縦隊に對し木葉狹隘に向ひ前まんこを企圖せる敵に對して側面より之を制せんとし次に第五想定^の木葉狹隘占領部隊の菱形村の陣地の如きは純然たる模範的側面陣地の成立したるものと謂ふ可し

二、前項要點の利用に就て

狹隘地帯に於て着眼す可き要點右の如しと雖も要點何れも常に之を用ゆるものと解す可からず我戦闘目的、兵力を基礎として考案し之れに適合するものにして初めて撰用の榮を擔はしむ可きものとす即ち木葉狹隘に於ては多くの要點を棄て、其二を採り而かも最後の新情況に會しては又其一を

顧みざるに至りしに非ずや又思へ第三想定ノ左縦隊ハ單獨地形ノ助けに據るこ云ふ當然と思はるゝ如き策を排して他の狹隘ノ一端植方方面を目票とせしに非ずや再言す戰術ノ眞味運用ノ妙利實に此等機微ノ間に津々たるものあることを

三、狹隘地帯と廣闊地帯に就て

専ら局地に於ける研究をなすに當りては戰鬪は局地ならざる可からざるが如く又狹隘地帯ノ論究をなせば之れが應用ノ範圍最も廣大なるが如く思惟せらるゝを一般とす之れ一應理あり何者其地部毎に攻防ノ法利用ノ術を研究解決し得るを以て山地畏るゝに足らず河川憚かるの要なしとの信念を有するに至るを以てなり學者が此自信力を蘊蓄するに至ることは即ち研究ノ効果ノ發現にして其本旨に合するものと

謂はざる可からず 然り而して之れと同時に常に眼界を大にして局部に馳せず大綱ノ觀察をなすことは亦切要なることとす局地戰ノ論究漸く章節を重ねたるを以て茲に本題に就き一言を開陳し以て讀者ノ大綱觀察力養成ノ一助に供せんとす

本題は狹隘地帯と廣闊なる地域とに於ける戰鬪ノ性質に就て概論せんとするにあり予は之れに關し次ノ如く判決を下さんとす

狹隘地帯は決戰に適せず廣闊地帯は之れに適すと之れ決して珍説にあらざる定説なり

狹隘地帯元より利用し得ざるに非ず又決戰し得ざるに非ず即ち交戰者ノ一方頑として動かざるに於ては遂に決戰成立するなり現に木葉狹隘占領部隊ノ如きは旅團主力ノ情況上

決戰の覺悟を以て終日交戦しありたるに非ずや故に地形の爲め決戰成立せずと云ふことなし
然れども退いて考ふれば戰鬪經過の迅速なるは障礙地帯たらざる廣濶地帯(平坦開濶地)と云ふ意に非ずにあることは明かなり左れば自ら決戰を求めんとするものは廣濶地帯に戰場を撰むは當然のこととす然らば防者と雖も戰鬪の經過迅速なる方面に於て先づ敗るゝの危きを畏れ亦其主力を此方に用ふることを考ふるならん茲に於てか兩者主力の衝突即ち決戰生起せざらんと欲するも得可けんや
是を以て企圖する決戰は廣濶なる地帯に撰まるゝを常とし狹隘地帯に於ける戰鬪は全般よりすれば屬目的より生ずるものにして云はゞ個々の部分戦たるを免かれざるものとす彼の沙河の會戦を見よ開戦以來初めて大々的の攻勢に轉じ

たる露軍は先づ其左翼即ち本溪湖方面狹隘地帯に於ける成功を以て勝利の端緒となさんことを期し運動容易なる鐵道線路に沿ふ廣濶地帯の行動は當初反對に之を控制せしが如し此隊勢を看破したる我日本軍は戰鬪の進捗當然緩漫なる可き最右翼に敵を支持し空手彼の到るを待たず決然廣濶せる方面より之を迎へ撃ち遂に彼の計畫をして全く水泡に歸せしめ其當初の企圖はたまく以て我に攻勢移轉の好機と梅澤旅團并に騎兵第二旅團に本溪澎方面太子河々畔の光華を與へたるに過ぎざりし又見よ奉天會戦に於ける鴨綠江軍と第三軍との戰鬪經過を前者は馬群丹の一地に二十日を費し後者は日々轉戦して戦を結局に導きしに非ずや之れ滿洲軍の大計畫上正に然る可しと雖も而かも何れも決戰に前進したるものなれば此差異は一に地形上の感影然らしめたる

ものと謂はざる可からず

以上の論旨を縮小すれば前第一項に述べし要點中其兩端附
附に於ける戰鬪は決戰に適し内部に於けるものは自然に待
久の性能を有する者たる可きを知らん而して之等の關係は
恰かも一小戰鬪地に於ても防勢地帯と攻勢地帯とを成形せ
る原則と一轍にして之を大梯尺に擴張したるに過ぎず

第六章 河川の附近於ける戰鬪

第一節 河川の定義

茲に言ふ所の河川は戰術上特に論究を要する所のもの換言す
れば戰場に於て攻防兩者の戰法を主宰する丈けの價ある者な
らざる可からず
至る所徒渉し得る如き又短橋にて容易に渡過手段を講じ得る
如きものは河川には相違なきも吾人が採て以て論題となさん
とする者には非ざるなり
又河川の方面に於ても作戰路に平行しあるものよりは寧ろ之
れに交叉しあるものを以て關係多しとす何者作戰路に平行せ
る者は彼我の利害關係同等なる可く作戰路を横ぎり彼我の中
間にあるものにして初めて兩者の利害關係を異にすべければ

なり
故に本章に於ては主として上述の關係にある河川に就て論ずる所あらんとす

第二節 河川ノ特性

河川ノ附近に於て生起する戰闘は概ね左の現象を呈するものとす

河川を超え攻勢を取らんとするもの	河岸に生起せる戰闘 (初期)	一岸上に於ける戰闘 (中期)	酣戰 (末期)
河川に據り防勢にあるもの	河岸の敵兵を驅逐し渡河設備をなさんとする	渡河の設備作業并完成後主力の渡河を敵岸に位置して掩護せんとす即ち彼岸に立脚地を確保せんとする	彼岸にある部隊の掩護により速かに彼岸に主力を移さんとする
	河岸附近にありて敵の企圖を妨害せんとす	掩護に任しある敵の部隊を撃破れ敵の企圖を滅却せんとする	敵の全力の渡河を終らざるに乘し決戰せんとす

右により河川を挟みて生ずる戰闘は大なる困難と大なる術策とを要す可く若し其初期然らざるも中期に於て攻者失敗

せんか更に全く之を再興せざる可からず其後期は一般戰闘に在りては畏らくは緒戦なる可きも此時に至りては最早河川の影響する範圍極めて寡小となりたるものなれば河川に在りては末期なり而かも實際の戰闘は尙ほ之れより遠き以後に非されば處決せらるゝことなきものとす(決戰するとせば)是を以て河川なるものは戰闘に左の特性を供呈するものとす
戰。闘。の。進。歩。に。多。時。を。要。せ。し。む。故。に。持。久。目。的。の。爲。め。に。利。し。て。有。利。な。る。を。一。般。と。す。

而して此困難なる戰闘の實行法并に河川利用法等に就ては現に代用する圖上に於て研究する所あらんとす

第三節 圖上の研究

想 定 (二十萬分一熊本高瀬) (三萬分一植木)

一、大津を経て前進せし東軍混成旅團は三月一日朝植木附近に

於て有利なる戰鬪の後敵(高瀬)を経て前進せしもの(木葉狹隘)に向て急追し伊倉北方岡阜地に於ける敵の抵抗を排除し正午十二時敵を全く菊池川右岸に驅逐せり

二、敵は大困難を犯しつゝ、退却し其最後部隊は辛ふして鐵道橋により彼岸に移るを得しも之を破壊する能はざりし然れども高瀬の橋梁は爆破せられたり

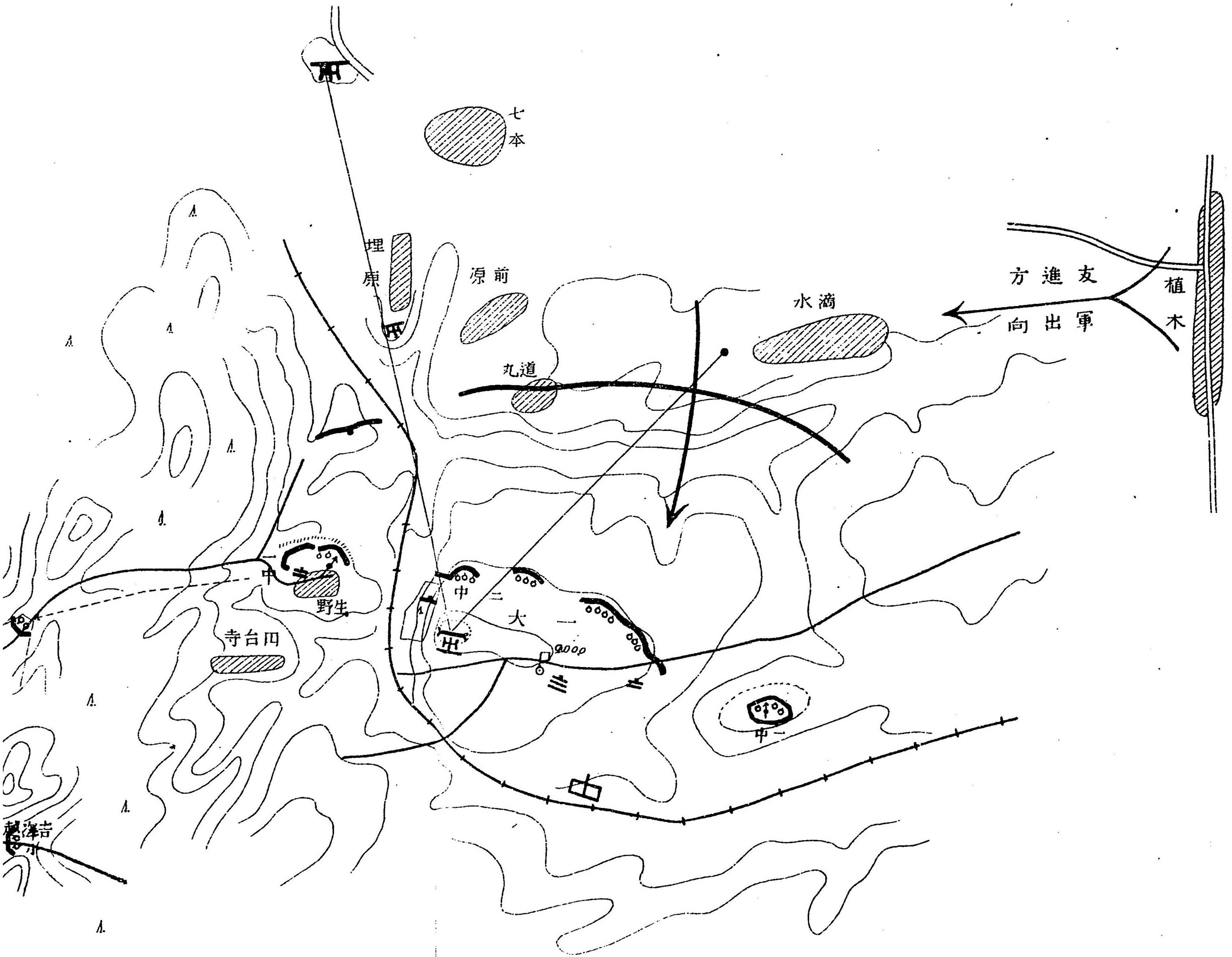
三、旅團長は勢に乗じ今日中に菊池川を渡河するに決心し直ちに諸準備に着手せり

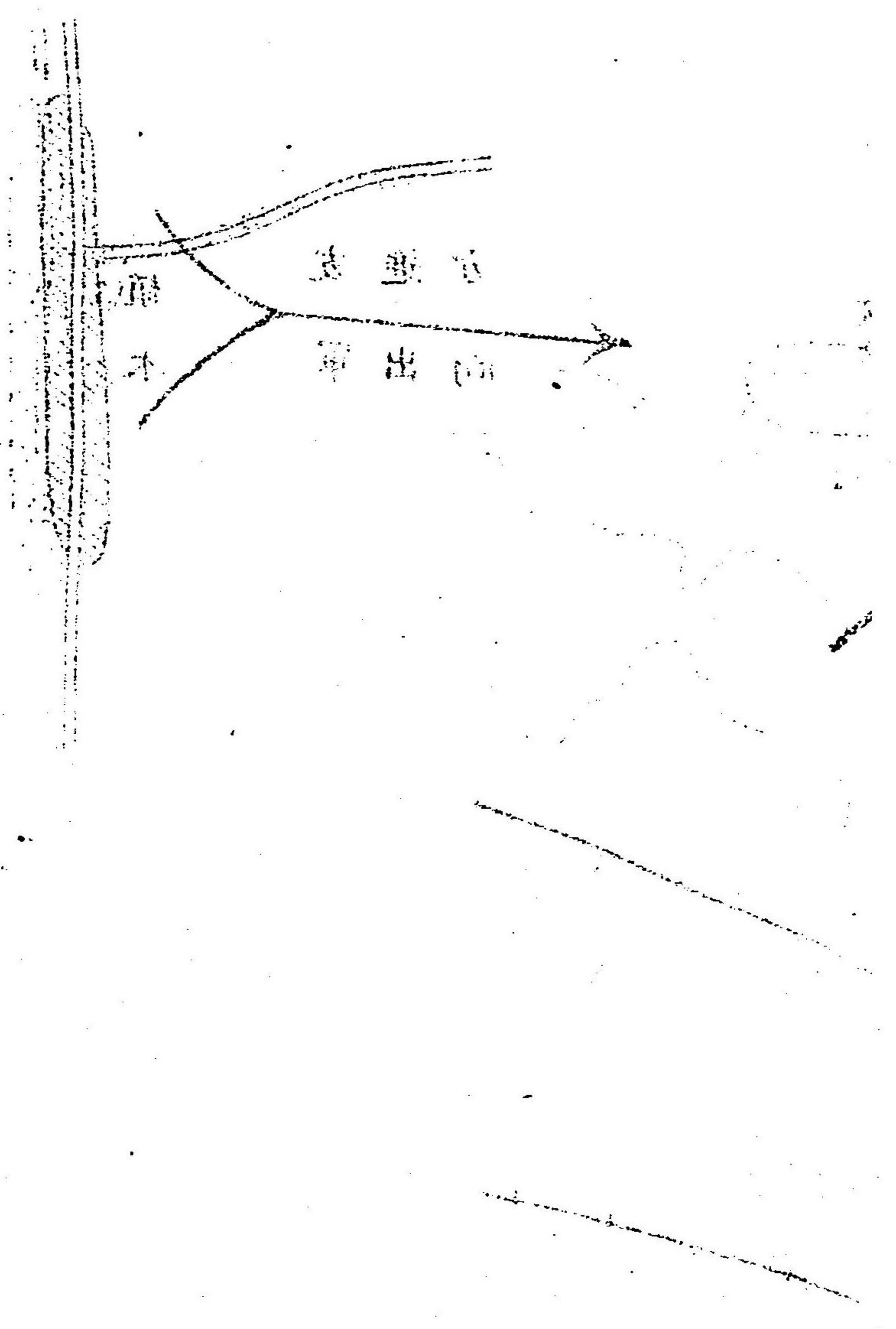
午後一時迄に知り得たる情況次の如し

敵の歩騎兵は王名より下流の菊池川右岸各所を監視しあり追撃中敵の砲兵は高瀬西北岩崎附近に於て應射せしが如し

敵の主力は築山附近に集合せんとしつゝ、あるが如し

卷之三附圖第五





菊池川の状況は地圖の如し

此時に於ける旅團の情況次の如し

歩兵二大隊山砲二中隊を主幹とせる追撃隊は高瀬對岸大倉の高地に在りて梅林村寺田の西北河川屈田部より高瀬南方河川の屈曲部附近間を(二萬分一圖)又他の歩兵一大隊は下附近に在りて玉名より寺田西北河川屈曲部間の偵察に任じあり

旅團主力は生見附近に

又架橋縦列一縦列は生見に到着しあり

問題

混成旅團は如何にして渡河を強行すべきや

研究

此問題は惜哉高瀬の北方に連接す可き地形圖なき爲め充分な

る研究をなすことは出来ざる故旅團の完全なる行動を説くこと
となく唯單一なる某研究目的を達するを以て満足し様と思ふ
故に讀者亦之を諒し本研究を以て旅團行動の完璧なるものと
は見做さぬことが必要である

一、旅團の渡河方面は何れにあるや
之れには大約

梅林村方面

高瀬町方面

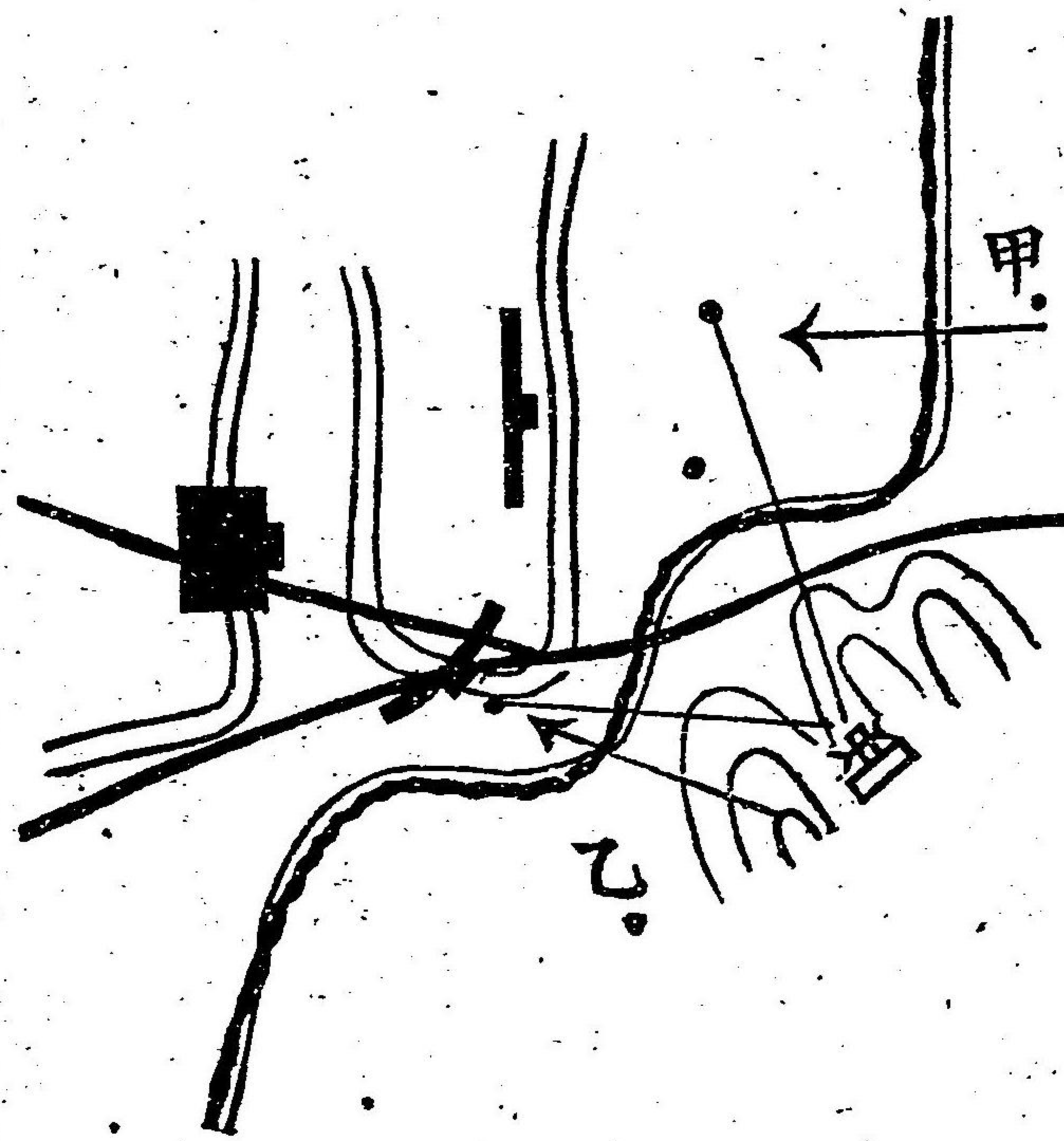
の二方面がある蓋し前者は旅團の現在せる位置より最も近
くあり後者には鐵道橋と其下流小島北方にて深六十珊米の
淺瀬との天然の渡河點があるからである 然り而して之れ
より下流部に於ては河中大にして架橋材料足らず又上流は
悲哉地圖なくして其適否を確むるに由むきのみならず過度

に進路を離れ迅速の主旨に合せざるの不利を償ふ程適當な
る局地が存在することは廿萬分一圖によりて概ね判断し得
可ければなり

二、兩方面大體の比較は如何

諸進みて此二方面を比較すれば次の如しである

a 敵は彼岸に於て何事をするや
之れは元より不明であるが我は
抵抗を受くるの覺悟を以てせね
ばならぬ何者抵抗を覺悟せぬ位
ならば渡邊點を撰むの必要は當
初よりないからである
敵が如何にして抗戦するやは亦
不明であるが第一に着意すべき



第六章 河川ノ附近ニ於ケル戦闘

は餘り良好ではない様であるが高瀬西北方の高臺の線である此高地は彌富村より北方に連亘して居ることは(廿萬分一圖)を見ると高瀬の西側に流れて居る錦川は石貫川の下流でありて三ッ川附近の山間より直南下しあるにより此小川と菊地川間は平坦の地區で其西方は即ち臺であると判断し得るによりて明かである

b 甲乙渡河後の關係は如何

甲は豫期する敵の低抗の正面に向ふ如くなる併し歩砲兵を彼岸に纏めて使用するの餘地あり又敵の主力の位置を遠ざかりあり

乙は渡河後の敵の側面に對向するを得又此岸上の高地よりは最も有利に彌富村附近の敵を射撃し之れに協力するを得る然れども其地域は極めて狭くして到低我兵力を有

利に使用することは出來ぬ又彌富の敵の側面に當るを得ることも我戦線が北面しある際敵が其砲兵を大野村尾崎附近の高地に出し其歩兵を以て河に翼を托し東面して攻撃し來る時には甚た危険の情態にあるものと云はねばならぬ

故に安全は甲に在り危険は乙に在りと云はねばならぬ是を以て追撃の要義は迅速に敵の退路に迫るに在りと云へ今は既に々々菊池川の障碍により自然に時を借したる以上は例へ渡河後正面に當るも甲策を採るの至當なることは局地の關係上大勢動かす可からざるものである

三、細部の關係は如何

前論により例へ甲案適當なりと雖も渡河が不可能なるに於ては之を見棄てねばならぬ故に其難易を比較すると同

時に成るべく大勢に以て良好なる甲案を成立せしむる様に力むるが至當である

乙案は大倉北方^{52.3}井に大倉西南^{53.3}高地井に小島北方附近よりは彼岸に於ける鐵道線路の凸道井に高瀬村永徳寺西南方の堤防に側背射をなし得可きを以て敵が之れに據りて近き妨害を加ふることは能はざるも彌富村八代附近各所即ち敵陣地よりするものは我渡河點に其害を及ぼすを得る但し敵前に於て困難なる架橋作業を実施するを要せざるは此方面に於ける特點である

甲案は河岸直接に位置せる敵の監視部隊を撃退することは決して難事でない之れ龜頭、迫附近の高地は乙案と同様前岸に有利に威力を及ぼすを得可く尙ほ河崎、岩崎間の地區をも掃射し得るから渡過の掩護は頗る適當に實行する

を得る故に之等に就ては先づ乙案と大差はないからこの關係の優れる丈けは此案の取柄である然れども此案の至難とするは架橋を要するに在る依て架橋を適當に實施する方案の立つか立たぬが此案死活の分れ目である

此死活を決するには再び地圖の不足を訴へざるを得ないが現在せる部分に就て推斷すること、せん

木葉高瀬道は一側若くは兩側に行樹があるから鐵船組立ての爲には幸ひにも木葉川を利用し得る併し岩崎南端學校附近に敵の砲兵がある場合には高瀬の東北端より寺田西北方屈曲部の稍々上流に至るの間は全く此砲兵火を受くるから此間に於ては晝間の架橋作業は至難と云はねばならぬ故に架橋の爲めには晝間は前岸の敵を打ち拂ひ時々逐次の掩護の部隊を渡船によりて渡過せしめ架橋點に

於ける所要の準備作業を終へ薄暮ならんとする頃より宮前西方附近に材料を運び急速に架橋を實施して渡るか若くは木葉西方稻佐安樂寺を経て宮前附近に至る方向より除々に架橋縱列を進め主力亦之れに移りて晝間架橋し得る場所を發見して實行するか法の策を採るを至當とす之を要するに前論の如くして甲案はcに於ても絶対に非認す可き者に非ざるを知る以上は無論此案を採用するを至當とする

四

一點より渡河するか或は二點よりするか

旅團の目的が今日中に強行渡河せんとするにある以上は何れよりするも敵に我企圖を發覺せらるゝに至ることは至當である然らば此際敵を欺く目的を以てする所謂陽渡河なるものは其必要を認めない故之れはなさぬが宜い

併し乍ら一點より渡るよりも數ヶ所よりする方が迅速であるから危険の時機を減ずる目的でならば無論數ヶ所を利用するが適當である

然るに今や旅團の撰む可き宮前と高瀬南方との二方面は高瀬の部落によりて全く兩斷せられ一方は他方に生じたる危険に趣く能はざるの情況にあるから後段の目的にも合しない併し乍ら一般の戰鬪に於ても助攻とか脅威的攻撃とかが必要なることあると等しく兎に角高瀬方面は菊池川中の一弱點(天然の渡河點存じある故なると又砲兵を龜頭迫附近の高地に位置せしむるとの關係上全く開放することは適當を欠くものであるから一部隊を此方面に向はしむの必要がある而して此部隊は獨り危険に陥らない様に宮前方面の進捗を考へて動作せしめたならば其効も

空しくはあるまい

本想定の結論

本研究は之れにて局を結ぶが借吾人は何事を學び得たであらうか之れは人毎に異なりて居る可きは勿論であるが予の照介せんと欲せし所のものは次の數件なりとす

其一、強行渡河は如何なる地形に於て企圖し得るや

其二、強行渡河は晝間になすを本然とす何者此岸よりする火力の制壓は晝間ならざれば實施し得ざればなり夜間不意になさんとするも一旦敵に發見せられんか遂に決行の機を失ふて晝間に至る可く遇々一部の渡過し得たるものは天明後は彼岸に於て殆んど殲滅の危に陥らん其三、故に敵の監視部隊を驅逐するは晝なるを要す而して彼岸に堅固に陣地を構成す可きなり然れども晝間なる

が爲めに折角渡りたるも敵陣地より優勢なる銃火を受けざる可からざる如き場合は此限りに在らず此の如きは元來の渡河點撰定に於て失策せるものなり又夜間守備なき側方より渡河し不意に河岸の敵を撃攘することを豫期し得る如き場合は例外とす

想

定

(二十万分一)

熊本、八代、砂取、御船、川尻、宇土、米山、七瀬

一、北軍一師團半は綠川上流地方より御船附近に集合せる敵に對し健軍村東方の臺上に於て決戦を豫期し其歩兵一聯隊騎兵一聯隊二中隊野砲一中隊工兵一小隊より成る一團隊は加勢川支隊江津湖西方地區に於ける加勢川の線を守備し以て軍右翼の掩護に任じあり

二、敵情并に地形に就て支隊長の知り居るもの左の如し

敵の最前線は東方に於ては赤井川左岸の線より支隊方面に在りては鱒上仲間下仲間僅少なる歩兵部隊を其以西には敵の騎兵も運動しあり
緑川并に加勢川は圖上の如くにして其本流は徒抄するを得ず又赤井川屋形川は島田六嘉村より下流は徒抄し得ず
其他の細流は歩兵の行動を許す

問題

加勢支隊は如何にして任務を達成すべきや

研究

一、支隊の爲め緑川の價值

a. 敵の渡河を絶對に拒支し得るか

之れは一寸考へるとなし得る様である何者此河は奇態にて我岸のみに堤防があり至る所有利に敵對し得るからで

ある去り乍ら此堤防に依頼して至る所の各方面を防がんが爲めには我兵力は分離する而して左翼こそは軍主力と江津湖に依托して居るが右翼は殆んど如此配備する時は止め度が無くなる若し強て之を限界せんと欲すれば夫れ其所に障碍も頼むに足らないと云ふ欠陥が出来て來るのである

如此なるを以て際限なく延長せる障碍は何れも絶對に之に據ることとは不可能なるを以て遂には眞面目の戦闘は河岸に起らずして此岸上に於て生起せらるゝ様になる又他方面より觀察するも河岸直接に兵を配列するときは火力の戦闘に於ては毫も障碍に御蔭することなく遂には損傷を補充する力の強き優勢なる兵力を有する者に壓せられ戦闘の第一階段は障碍を利せずして終ると云ふ結果を生む

る
故に此障碍は河岸并に兩岸地勢の關係上高瀬附近に比し
守るには易いとは云へ斷崖絶壁岸に迫り全々敵の企圖を
斷念せしむる如き地部もなく云はば平齊の地形であるか
ら全く敵を我岸に移らしめぬと云ふことは之を保じ難い
のである

二敵の渡河し來る公算あるは何れの方面なるや

之れは敵のことであるから分らぬと云へば全く不明の内
に葬むることと出來る乍併然るときには防者は配備の方
針が立ち兼ねる又諸種の場合と云ふものが夫れが爲めに
想定せずしてあるから確言は出來ぬが判断をせねばなら
ぬ之れが戰術である
諸研究して見ると此方面は大約次の二方面である

其一、田迎村南方方面

其二、川尻方面

田迎村南方方面は敵の現在せる位置より近く、將來彼我の主
力が相合ふならんと思はるゝ方面とも隔絶しあると云ふこ
となく、主なる道路も通じあり河川の景況も灣曲部各所に在
り又六嘉村下六嘉西端の高地并に森崎南方豊秋村の高地も
河岸地區へは砲兵の爲め適當に利用し得るからである
次に川尻方面は河幅大となり若くは二個架橋を要するの難
はあるも我主力を離るゝこと遠き地に於て川の北岸に移り
以て事をなさんとするものゝ爲めには又適當なる一方面と
云はねばならぬ

然り而して此兩方面の中間日吉村東西の地區は加勢川緑川
の兩障碍の間最も狹窄しありて到底眞面目の企圖をなす可

き地ではない

三、支隊は如何なる要旨により配備さる可きや

a. 戦闘目的は如何

支隊の前面に敵の来るや否やも未決の問題であるが先づ来るものとして立案せねばならぬ來るとして我より優勢か弱勢かは不明である而して軍は決戦し様と云ふのであるから支隊も無論決戦である唯之を河の右岸に於てなすこと云ふのである而して此決戦の爲めには敵の兵力如何を問はず河川の影響を我に有利に利用し得る方面にありては攻勢を採り然らざるときには防勢に立つので何れにしても決戦するのである

b. 兩方面の何れに重きを置き配備すべきや
之れには次の要件を考ふるを要する

1 決戦の場合に敵が遠くから來るか近くから來るか

2 支隊は軍の決戦方面には顧慮を要するか如何か

1に就ては決戦に可成速かに又直接なる影響を與へ様とするは當然であるから近き田迎方面を撰む公算が多い此事は讀者は主力の決戦方面健軍村の臺に障礙なく至り得る敵が敢て障礙を越へざる可からざる此方に來るであらうかとの疑問を發するならんも夫れは今は研究以外のこととし此疑問を生ずる丈け夫れ丈け遠き川尻方面よりも田迎方面の方が公算が大であること云ひ得るのである

2に就ては前述の如きこともあるから敵は或は我前面には何事もなさぬかも知れない然るときは直ちに軍主力の決戦場に趣く覺悟を要する

顧慮する二方面があり而して之に對して一の決定的配置

をなすを得ざる場合には所謂等邊三角形の頂點に準備の姿勢にあるべきは理の當然なるべきも今や情況は之を左右し以て支隊の重點を田迎村方面に偏せしむ可く要求して居るのである

c、決戦の爲め兩方面共に攻勢を採るべきや即ち所謂共に半渡に乗するの計畫をなす可きや

出來得可くんば元より希望する所である乍併二兎を追ふ者一兎をも得ずであるから過分のをなさぬが宜い殊にbの如く論究する時には川尻方面へは若干遠くなるから此方に向てする計畫は確實なる法を以てするがよい即ち或は不幸にして敵を全く渡過せしめ終りても寧ろ我は整然たる準備を以て之れに當るの處置をなし置く方が至當であらう

然り而して此場合の何れに論なく其戦闘を導くには例へ消極に專守の不可止情況となるも成る可く我主力方面と離斷せらるゝことなく換言せば翼側の掩護を期し得る隊勢にある如くなるに注意するがよい即ち西方に撃退せらるゝに至る如きことなきに力むること之れである

d 河岸直接の配備は如何にす可きや

之れは以上論ぜし所により自然に決定せられる即ち

敵の來る公算多き方面には 比較的大なるものを

之れに反する方面には 比較的小なるものを但

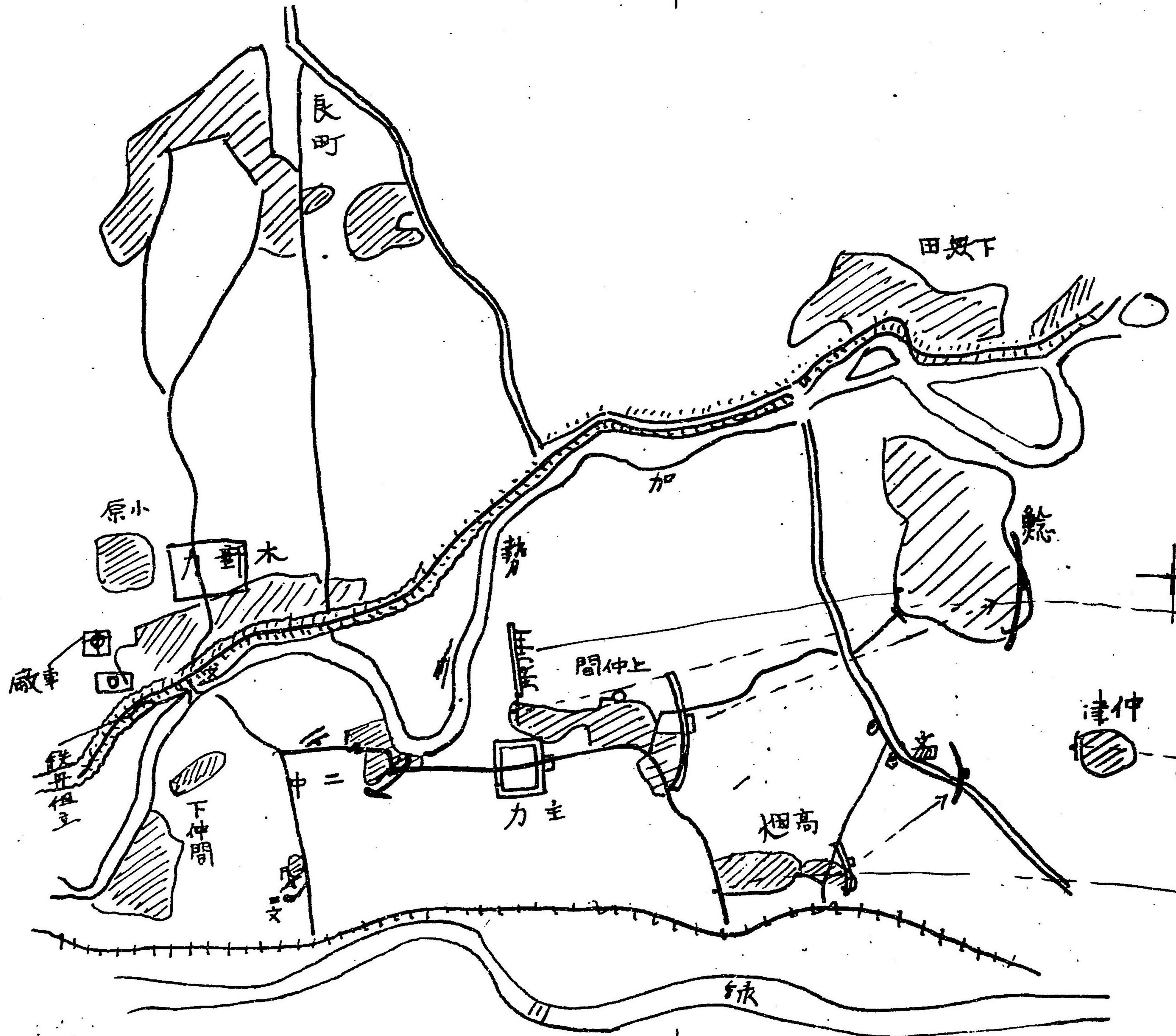
し此方は主力の位置を去ることが遠いから速度ある騎兵の大部を用ふ之れ亦決戦の爲めに必要なる歩兵の數を減じ置く爲めにも此考慮は必要である

四第三の外尙必要なる者は如何
 通信設備である此事は方今の戦場に於ては何れも同様であるが殊に河岸の監視部隊により障碍を離てある敵情を知り且つ河岸に於ける一瞬の好機に乗じて戦はんこし而かも諸方面に生ずる戦況中の最も適良なるものに投せんとする河川防禦に在りて然りとする尙一つは支隊の現況に在りては可成其運用を多技ならざらしめんが爲め川尻方面にては敵の渡過若くは渡過後の動作を困難ならしむる如く市街の物料を用ひて諸種の副防禦設備をなし置くの要あるを認む

五、以上論究の結果に基づき尙ほ詳細なる部署法を略圖を以て示せば附圖第六の如くである

想定 (同前想定)

卷之三附圖第七



- 一、架橋作業中掩護
- 二、排障ノ位置
- 三、排障後ノ位置

一、熊本平地占領の目的を以て久留米より南下したる北軍師團は四月一日白川右岸の地區にありたる敵の歩騎部隊を撃退し夕刻第一線諸隊を以て加勢川(廿万分一)右岸の地區を占領し同夜主力は熊本東南部に宿營せり

二、翌二日師團は現在の姿勢にありて加勢川左岸に於ける偵察の結果(二万分一)

約混成旅團の敵は赤井川左岸飯野村南方より六嘉村附近に亘る高地を占領しあること
敵の監視線は概して赤井川の線に配置せられ木山川右岸臺上に於ける我監視部隊と相對しあり而して加勢川方面に在りては敵は我岸よりする近距離射撃を避け鯨大川村上仲間に歩兵の小部隊あり下仲間附近にありし敵の部隊は本日我岸よりする射撃に堪へずして上仲間に退却せり

故に上仲間及び下仲間西方の三角島は我手に歸せり
敵の騎兵部隊は緑川左岸杉合村、川尻方面に行動しあり
赤井川屋形川の合流點附近より下流は徒渉し得ず其他の
細流は歩兵の行動は妨害せずと云ふ又緑川は徒渉し得ず
と

三、師團長は明三日拂曉より主力を以て沼山津より飯野村方面
の敵に向ひ一部歩兵一聯隊、騎兵半小隊、野砲二中隊、工兵一中
隊、架橋縦列、衛生隊半部を以て六嘉村方面敵の翼側に向て脅
威攻撃せしむるに決し之れが爲め薄暮より主力を健軍村東
方地區に脅威部隊を田迎村に移し位置せしめたり

問題

脅威部隊の攻撃計畫

研究

此計畫の重なるものは

第一渡河

第二渡河後の前進

の二計畫である

此第一の者は今夜になりて脅威部隊長がなす様では到底追付
かない少くも師團長は天光のある内に少くも幕僚と工兵將校
とにより所要の偵察準備を終へ隊長は之れが採否を決すれば
宜い位迄にはなりて居らねばならぬ然り而して此渡河の成否
は脅威部隊の爲め將來の成否を卜すべきものである何者之れ
によりて初めて河の彼岸に活躍の根據を得るからである依り
て最も實行法に就て着意を要する

一、加勢川渡河の難易如河

然るに脅威部隊の此渡河は幸運にも良況に實施し得る公算があるものご云はねばならぬ夫れは

a. 敵の主力の位置には大に離隔しありて到底主力が我渡河點に向て攻撃し得ることはないらしい

b. 對岸の手に入りしものは無いが上仲間以西の地は吾勢力範圍と云ふも同じく綠川左岸の敵騎は之を妨害するを得ない

c. 夜間は無論敵に行動を庇するを得るから宜いが例へ晝間に於ても加勢川、綠川間の狹長なる地區を我岸上の堤防より制し得可きを以て上仲間以西に於ては先づ安全に架橋し得る

等でありて此情態は前想定に於て左岸より右岸に渡らんとする者の動作ごは雲泥の差である之れによりては讀者は同

一。河川同一地部に於ても作戰を進めんとする方向により大に便否のあるものであることを知り得るであらう

二。渡河點并に渡河の時期如何

渡河點は可成安全なる地にして而かも成る可くは敵方に近き點が宜敷此點よりすれば

木部附近にて掩護部隊を鐵船によりて渡過せしめ此部隊を以て上仲間及餘の敵の小部隊を驅逐し中瀬橋附近にて架橋す

るを適當するが如きも之れには

夜間に晝間眼前に現地を見能く熟知しあらざる地に於てする夜間の戦闘は確實に成算ある戦闘をなし得るや否や又中瀬橋附近は若し六嘉村附近或は豊秋高地附近に砲兵ありごせば甚た危殆なるものに非ずや

等の反問に對し明答する能はざるを以て適良きは云へない故に架橋點は右の如き反問を受けざる地なるを要す之には上仲間よりも西方でなければならぬ而して交通路の近傍がよい木部の南方は蓋し之れに適するものであらう
次には渡河の時期即ち架橋の時期であるが一の論旨によると晝間の方却りて都合宜き様であるが之れは師團主力との關係上今は斷じて不可である是非拂曉前に完成し拂曉の頃には全隊彼岸に渡り展開準備の姿勢にありて天明の頃視力の活動を初むると共に状況を看破しつゝ六嘉方面へと前進する様にせねばならぬ

三、渡河後の前進は如何

之れには

a、拂曉迄に何れに迄進みある可きや

b、天明後は如何に前進すべきや

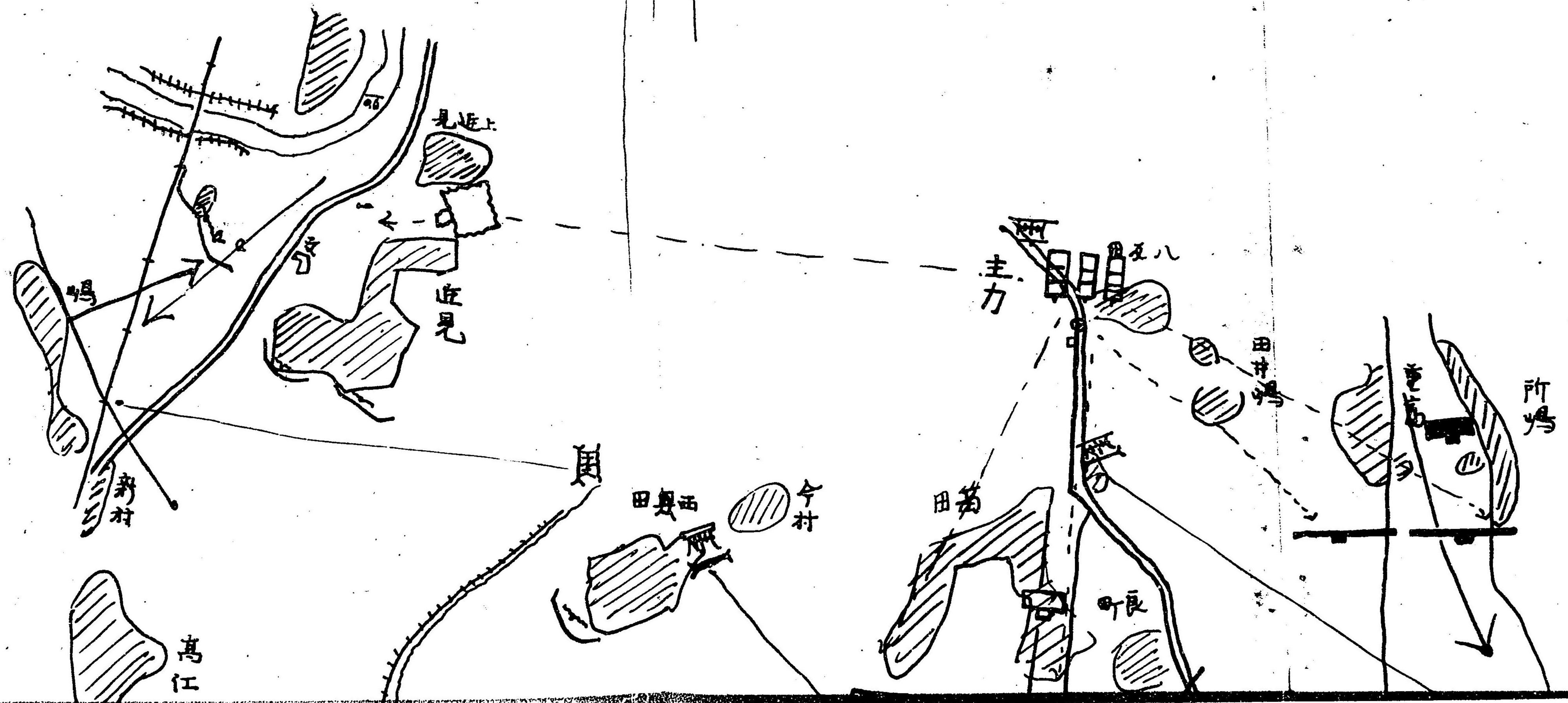
の二段となる

a、に就ては渡河後夜間戦闘をなすの利害に歸着するが要求より云へば拂曉の頃脅威部隊が餘上島村の線に迄進みあることは師團主力との關係上希望する所である併し之れ迄進むには既に敵ありと知る上仲間、餘及其附近にて夜間戦闘惹起せられん夜間の戦闘敢て辭する所にあらずと雖も此行動は所謂熟知せる短小距離と云ふを得ないから確實なる行動を期し難い従ていさ今より活動せんとする天明の頃混雜せる隊勢に於て敵の翼側前近くにあることは決して妙なるものでない脅威部隊が餘上島村の線に達する前には餘程の判斷を要する何者此線に至りてから後は隊勢を立て直すことは最早出來ない而かも此後の戦況を進めるには豊秋の高地

が大なる關係を有する若し此高地が敵の一部によりて強固に占領せられてあるならば之を力攻して以て敵の側背に於ける鎖鑰を奪ふ可きや若くは之れを遠く北方に避け加勢川に近く進み恰かも屋形川東方に於ける師團主力の右翼に連繫して六嘉村附近を包翼攻撃する如く戰鬪するか大ひに考慮すべき問題である此點からしても無暗に上島附近迄進むことは不當である

故に拂曉の頃には全隊が渡り而かも今後展開に便利の地點たる上仲間高田附近の線に迄進め置くが至當である

bに就てはaの未段に就て論じた通りでありて何れとも早計に決することは出来ないが拂曉の頃上仲間高田の線に迄進みあれば敵の敵は早晚退却せねばならぬであらう又退かざれば宜敷之を打つ可しである依て天明と共に第一の



主方人監視新
 田...
 透...
 ...

攻撃行軍は餘を略し餘學校高田の線に戦線を進むることである但し此間最も迅速に豊秋高地の状況を確かむることが必要である爾後の斷然たる攻撃前進は一に豊秋高地の状況如何に關するから此以上は計畫することは出来ない又計畫するも畫餅となるであらう

四、脅威部隊の計畫の成文に換へ且つ以上の論述と長短相補綴する爲め之を圖上に示せば附圖第七の如し

想 定 (同前想定)

一、熊本占領の目的を以て日向及び薩摩より球摩川河谷并に八代灣岸の道路を経て北進したる南軍師團は四月一日其前衛を以て松橋に本隊を以て豊福氷川間の地區に宿營せり

二此夜師團長の知り得たること次の如し(二十萬分一)

約一師團の敵は二日程前より熊本にありて緑川の各渡河
點を破壊し隈庄北方千町附近より下流は歩兵の小部隊を
以て監視せられ河の左岸には騎兵斥候徘徊す又御船附近
には騎兵部隊あり

此夜我騎兵聯隊の主力は隈庄に一部は御船南方岩下に在
り

緑川は古來白旗山南麓附近の外徒涉場なしと

問題

南軍師團爾後の作戰の爲め熊本以南の地形判断

研究

一地形判断は如何

地形の判断は攻防兩勢の目的の爲めにする所のものである
防勢の爲めであるならば我爲めに何れの地區は如何なる關
係をなすや何れの地域は如何なる利害を及ぼすや等を論究
し最も適良なる地區の利用法若くは陣地の撰擇をなす等
ある又攻勢目的であるならば同主旨を以て觀察したる結果
爾後如何なる方向に作戰を指導す可きやを判決するのであ
る

然り而して陣地の判断はなるに矢張攻防共になすことであ
るが其の範圍は狭小となり既に決定せられたる戦闘陣地に
就て防者各部の強弱得失の關係により如何に之れに配備し
又如何に利用す可きやを判決し攻者にありては何れの方面
に決勝攻撃を向はしめ何れを助攻とす可きや若くは之れを
要するや否や等直接攻撃に關する策案を決定するものであ
る

今爲さんごする所のものは熊本に入らんごする師團の前に敵もなく障碍もなくば何も判断の入る可き筈はないが今や我目的の地には敵あり敵は又何事をかなさんごしつゝあり而かも彼我の間の地形は平坦砥の如き者に非ざるにより是に於てか再後一步を踏み出す前に於て之れが判断をなすを要するに至りたのである

一 倍敵は何をなすか

目下判定し得るは我に向ひ攻勢前進をなし來らざることである之れは緑川障碍を破壊して居るからである

故に此障碍によりて我を苦しめ其後方にて何事をかなさんとして居るらしいが熊本附近に居るならば西は海東は山の此小平地であるから南にも東にも何れへも勝手に動作す

ることが出来る即ち師團は如何にしても此敵と戦闘は避けられない否之を撃攘せねばならぬのである

二 師團が敵に向て進む爲め先つ何事が關係するや

眼前に横はる所のものは緑川の渡河である此渡河に就ては

比較的安全に渡り得る所

渡河後の行動に便利なる様

との二要件が伏在して居る

此二要件を具足して居る方面があるならば一も二もないが然らざれば大に論究を要する即ち例へ眼前の障碍が安全に渡れたりとして更に再び大難に遭遇する様では何にもならぬ又渡河後は如何に順序よく進撃し得る公算あるも渡河が不成功に終るに近き様な情況ならば到底此法を採用することも得策でなくなる故に要するに此兩者の利害輕重を比較し

て採決せねばならぬから何れに重きを置くがよいとも決定することは出来ない

三、師團が安全に緑川を渡過し得る方面は如何

之れは熊本に向ひ直北に進むことなく御船方向より轉進する方が容易である何者川尻方面は障碍力も大に又現に敵の歩兵も居るも御船方向に岩下より進まんか此地には現に敵ならぬ我騎兵が居る而して此方にある敵は騎兵とのことであるにより最も見分け易き比較である

四、渡河後の情態は如何

御船方面よりするものは渡河後幾回も堅固なる敵の陣地に會遇するの患がある即ち屋形川右岸高木村附近並に木山川右岸の高地線等之れである併し師團は戦を避くるは目的でなく敵の在る所隨時之を攻撃することは逐次任務達成の域

に歩を進むるのであるから敢て避くるの必要はない主として川尻方面よりするものは全く渡河し終へたる以上は右の如く天然の堅陣に會すると云ふことはない併し當初の架橋作業にして一旦蹉跌せんか河岸の地形は之を強行するに由なく幸運にして作業完了するも渡河未だ完からざるに敵に反撃の機を與へ易き危険を有して居る即ち此際我は此岸より適當に之れに参加して既に渡河せる部隊を支持し此間に續々他隊を渡し展開を便ならしむる如き動作をなすに甚た不適當なるに反し熊本南方の地區は最も有利に敵に此機に乗じ攻勢運動に便利を與へあるものと云はねばならぬ尙他の關係より論ずれば第一策は敵に遠く障碍を渡る丈け夫れ丈け渡河後に於て後方に多くの餘地を存し動作の自由を得るも第二策に在りては渡河後背水若くは背海の危険が

後方に存在するものである之等は苟も戰略單位たる團隊の運用に當りて注意して避けねばならぬことである

五、三、四の結局は如何
之を要するに御船方面よりせんとするものは敵に遠く且つ妨害を受けざる最も安全なる地に於て障礙を越へ除々に歩を進めんとするものにして師團の仕事は渡河後に於て益々重大なる可く川尻方面よりするものは敵に近く危険の地に於て障礙を越えるものなれば師團の運命は此短期狭小の地域に於て決せらるゝものである換言すれば前者は安全にして一時の蹉跌より生ずる害毒の大ならざらんことを期する確實の策にして後者は勝敗を一に天運に委し人力にては確實を保し難き加勢川河邊の一舉に賭せんとする案である事茲に至ると其採決は或は人格に因ることとなるかも知れぬ

が予は事理明白なる此兩懸案に於ては後案を捨てし前策を採用せんとする者である何者堅陣は之を改むるに法あるも障礙は全く之を越ゆるに非ざれば我力を用ゆるに由なきを以て今は障礙渡過に便なるを主とするのである
抑も戰術なるものは
過誤少なく順境確實なる作戰の指導
をなすに存する若し此顧慮なく單に直突放行(出放題)に委せんか之れ戰術がないのである

判 決

六以上の所論に基づく予の判断は次の如くである

師團は岩下附近に於て緑川を渡り爾後其作戰は御船より熊本東南方面に向ひ導かるゝを要す

理 由

一 熊本の敵は近く我に向て攻勢前進することはなかる可し何者緑川の諸渡河點を破壊しあればなり故に師團は緑川右岸熊本南方若くは東南部に於て之れと衝突する覺悟を以て爾後の作戰を進むるを要す

二 師團爾後の作戰を進むるに二方面あり川尻方面並に御船方面之れなり
川尻方面よりせんとするものは敵に近く且つ障碍力大なる部より渡河せんとするものにして敵に我半渡を打つの好機を與ふるものなる可く例へ此危機を免るるとするも尙ほ近く障碍を背にして決戦するの不便と危険とを有す
御船方面より作戰せん爲め主として岩下附近よりする緑川の渡河は殆んど安全に實行し得可く例へ敵の妨害を受くることあるも兩岸土の地形は之れが強行策を實施するの地部

も之れなきに非ず而已ならず敵に遠く渡河するの利は渡河後其後方に存するの餘地の比較的大なるにより前者の如く甚敷背後の危険を感ずることなし然れども此方面に於ては將來御船北方高木附近並に木山川右岸高地線等に於て比較的堅固なる敵陣地に會遇する顧慮はあるも川尻方面に於て渡河直後危険の未だ全く除去せられざる時に於て敵の強制する決戦に應ぜざる可からざる者に比すれば尙ほ處するに時と餘地とを存するを以て優れりとす

三 右により明目御船に向ひ轉進する爲め區署の要領次の如し
騎兵の主力及び歩兵の一部を以て隈庄宇土方面に位置し師團の轉進を庇護せしむ
師團主力は拂曉の頃緑川の線に達し得る如く出發し其主縦隊は下郷堅志田を経て岩下にて緑川を渡過する如く其

他の一経路は高岳山南麓の道路より山崎安見を経て田口

に向ひ前進せしむ。但し一日夜に於て歩兵工兵并に架橋縦列を岩下に先遣

第四節 結論

一河川に據る防禦に就て

所謂河川防禦とは河川其者を我有に歸し置かんとするに非
ずして河川の障礙力により或は單に時間の餘裕を得ん爲め
に或は其後方に於て決戦をなさん爲めに利用せらるゝを
云ふ。單に時間を得る爲めにする利用法に就ては本章圖上に就て
研究する所なかりしが此目的は敵をして障礙を超越せしめ
ざるを以て達成するを得べきものなるを以て爲めに生

する戦闘の主なるものは河川を狭めて行ふものならざる可
からず故に其配備亦豫想する敵の各渡河點に専らなるは至
然の結果さす即ち第一線に多兵の配備をなすを要し待久戰
闘に於ける用兵法の原則は此場合に於て適用せらる可きも
のとす

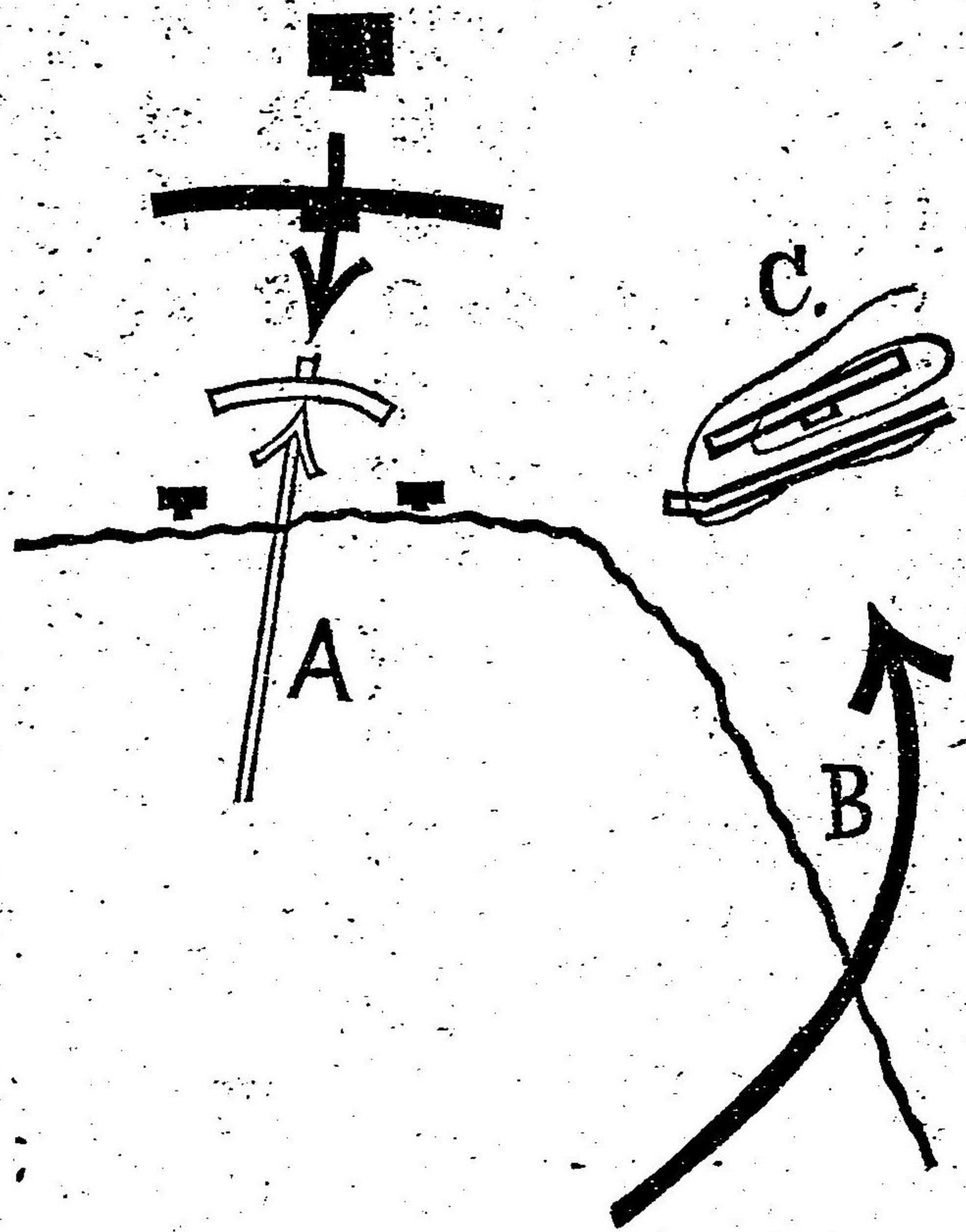
決戰目的の爲めにする利用法は之れに反し河岸に大兵を出
すなく主力を後方に集結し置くを適當とすることは先きに
説きし所の如し而かも尙ほ河岸に若干戰鬥力を具備せる監
視部隊を出す所以のものは之れに依りて攻進し來る敵の企
圖の大小眞偽を知り以て後方に控置せる我主力の運用を適
切ならしめんことを期すればなり左れば河岸に於ける我若
干の抵抗は敵をして其企圖を暴露せしむる爲めに有効なる
ものさす何者障礙の彼方より來る敵は是非共時に其殆んど

全力を擧ぐるに非ざれば監視部隊を撃退すること難ければなり四十年特別大演習に於て西軍近衛師團は鬼怒川河畔に於て殆んど斥候の有力なるものに過ぎざる敵に對し殆んど全師團を展開したるに非ずや良例とするを得ざるも以て障碍渡過點附近に於ける小兵が如何に敵に多大の感觸を與ふるものなるやの一端を表現せるものと云はざる可らず從て此監視部隊の行動并に隊長の戰術判斷に如何に深淵なるものを要するやを窺知するを得ん

次に河川に據りて決戦せんとする團隊は攻進し來る敵の主力の半渡ヲ乘するを要するは勿論なるも其何れが主何れが客なるやは容易に判定し得可きものに非ず然り而して之を確知し得るの時は既に敵の大部渡河を終り且つ各所よりするもの相互に相協力するを得るに至りたるの時なる可く從

て半渡に乗するの機や既に々々逸し希望は水泡に歸すること決して之れなしとせず故に此の如き場合に於ては一に防禦指揮官其人の決斷に待つあるのみ此自己の判斷を基礎とし機を失することなく欲する一方に向て突進するあるのみ此際に於ては眞に指揮官に固有せる機略の發動を見るを得可きものとす

夫れ然り然りと雖も決戦を豫期する防者も常に半渡の機を利せんことにのみを期待するを得ず何者攻者は防者に此の如き機を捕へられざる地に於て障碍を渡るを企圖すること第四想定の南軍師團の如くなる可ければなり故に防者亦之れに處するに計畫なかるべからず如何即ち左圖の如く

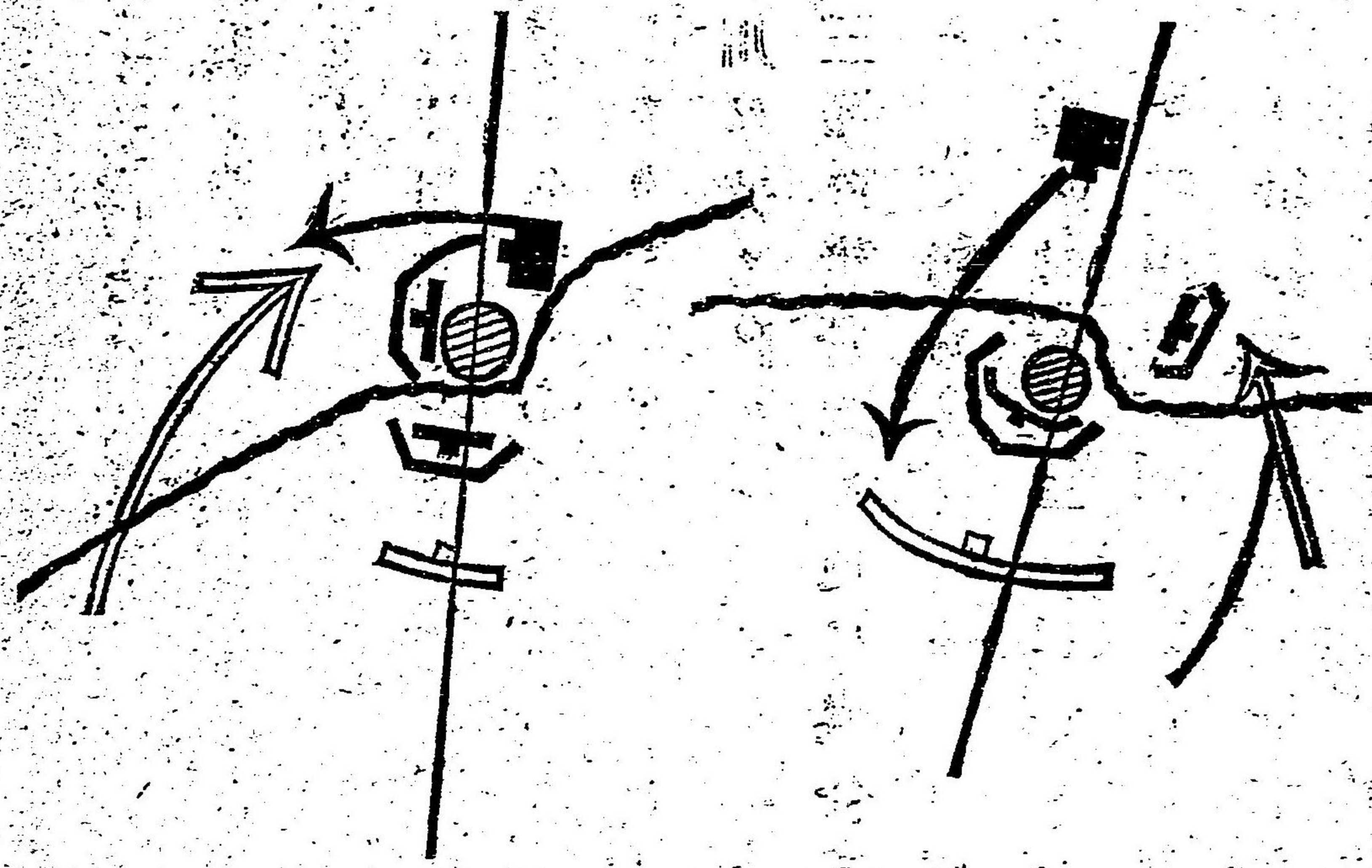


敵の眞渡A方面なるに於ては斷然半渡に乗するの策を採る可く
敵B方面より來る場合
に於てはC高地を
利用し以て敵を打つ
可し

之れを第四想定に見るに熊本附近に位置せる防者の行動は正に此の如くなるを適當とするが如し即ち川尻方面に半渡攻撃策を講し御船方面に對しては木山川右岸の高地線に據り決戦を交へんと企畫するに在り然り而して敵をして直進せしめずB方面に迂回前進せしむるを以て目的を達した

るものとし障碍の助けなくC附近に於ても決戦するの危険を感ずるものは此際退却運動に就き待久の作戰により好機の再來を待つの外なし
尙ほ河川を利用して行ふ戦闘に於ては其兩岸に跨り陣地を占領するものあり七十年戰に於ける「メツツ」の佛軍、二十七八戰年後役於ける平壤の清軍、廿七八年役に於ける遼陽の露軍等皆然らざるはなし此種の陣地に於ける交戦に於て勝利の要缺は敵の半渡を打つと云ふよりは寧ろ敵兵力の分離に乗せんとするに在り即ち

防者は復橋頭堡式に設備せられたる陣地に據り内部に於ける河川の交通は無論遺憾なからしめ以て敵を待ち攻者が河川により外圓周上に遠く相離れあるの機に乘し防者は圓心にありて河の兩岸欲する方面に兵力を速かに移動



一一六
し得るの利に依り一方
に向て突進せんことを
計るもの之れである
此策は「メツツ」に於ては
實行せられず即ち佛軍
が該要塞を去らんとす
るものと普軍が大旋回
をなして其背後に出で
んとする者と衝突して
開戦し佛軍は再び要塞
内に閉鎖せられたり
又平壤に於ては清軍に
して一決戦をなすの勇

氣と機略との富みありしならば船橋里方面に於て慥かに其
好機を發見し得たりしならん次に遼陽に於ては露軍は此企
圖を有しありしにも係はらず南面に於ては控置せる總豫備
隊の使用法を誤りて機を失し東面黒英臺方面に在りては敢
爲なる行動を欠けると時に戰運の大勢は定まり機既に々々
逸しありしとの爲め遂に其効果をを得る能はざりしなり惜哉
二河川に據る敵の攻撃に就て

第三節の諸研究を更に練合すれば先づ敵前渡河の要領を知
るを得ん即ち其渡河を企つ可き地は
一全般の戰術并に戰略要求に適應するを要す

第三想定に於て若し川尻附近が脅威隊渡河の爲めに最
も適良なりせば如何曰く例へ然るも之れ未だ決して採
るに足らず何者敵の陣地に直接に脅威を與へんが爲め

には加勢、緑河兩河中間地區ならざる可からず、川尻にて
緑川左岸に如何に有利に出で得るも、此要求には合せざ
ればなり

2 右の要求に適應しあるもの、内敵の監視部隊を撃退する
に便利なる地なるを要す

之れ河岸の敵を撃退して我一部隊を彼岸に進め、其掩護
下に架橋するの要あればなり

3 夜間の作業延ひて晝間に至ることあるも、此岸よりする火
力により能く彼岸を壓し、以て之を繼續し得る如き地なる
を要す

第三想定の爲め撰定せし大川村地區の如き又第一想定
の者の如き之れなり

然りと雖も、此の如きの地は到底到る所に於て之を發見する

こと難し難きが故に強て敵の監視區域内に於て渡河せんと
するには所謂鷄を割くに牛刀を以てする如き勞力を要す、於
是か

敵の監視以外の地に於て渡河するを要す

とは従來兵家の唱導せる所に於て此要缺は今日と雖も決して
消滅す可き者に非ず、然り而して此監視以外の地内に就て
も將來に於ける作戰上の便否を顧慮して之を撰定するを要
す、於是が指揮官たるものは將來の爲め大に地形判斷をなす
の必要を生ずるなり

第四想定に於ける南軍師團は即ち此要求ある情況に會遇し
たるものなり、蓋し該師團は先づ岩下に於て緑川を渡りて白
旗附近の要地を占領するを得ば次に御船川にして又徒渉し
得ずとするも、今や之れが處置をなすことは此高地線の威力

大なるにより決して難事に非ざるなり如斯して師團の作戦は漸次障碍を排除しつつ其目的に向て進捗せしむるを得るならん

以止述ふる所の要缺は之を短狹隘に於る戦闘に見るも同一なる可く谷地戦亦然り之等の地形は唯障碍其者の程度に其趣を異にするものあるのみなり是を以て谷地戦を解するものは狹隘戦を知る可く又河川の戦闘を適當に指揮し得るの士は亦谷地狹隘等に遭遇するも敢て逡巡せざる可きを信す

第八章 結論

本書卷を重ねる三章を追ふこと七所謂局地なるものゝ戰術的利用法の概要を各種各別に論究せり然りと雖も地勢は決して單一なるもの非ず即ち谷地には之を成形せる地部内に高地

あり河川あらん又河川に於ても其戦闘に關係せる森林も村落も高地も加はりあらん故に其戦闘をなすに當りては各局地に應ずる各種の戦闘法を加味し悉く其宜敷を得るに非ざれば戦闘は不利に終るが如く思惟せらる一小局部の小闘毎に監察するときは正に然らざる可からずと雖も指揮官たるものは斯程迄に神経過敏に考慮多岐なるを要せざるなり要は其一戰場に於て就中最も關係深く其戦闘指揮を左右する地部の特性を主として計畫するにあり然らざれば迅速なる處決機に投ずる運用に過誤を生ずるの悪因を成さん

又局地各特長を有し之を諸種に利用するを得ること本書概記する所の如し然りと雖も元來地形は利用を待つと同時に兵は亦運用を待つことを忘る可からず讀者若し一たび本書を閲覽したるを以て足れりとせんか之れ形を眺めたるに過ぎざるなり

形。の。み。を。知。る。も。の。は。彼。の。平。壤。に。於。け。る。清。軍。遼。陽。に。於。け。る。露。軍。
 と。何。の。撰。む。所。か。あ。ら。ん。方。今。兵。學。も。昔。日。と。異。な。り。科。學。的。研。究。の。
 一。科。に。加。は。り。た。り。と。雖。も。科。學。的。の。研。究。は。自。ら。限。度。あ。り。到。底。其。
 奧。義。に。達。す。る。こ。と。能。は。さ。る。も。の。な。り。殊。に。兵。學。の。こ。と。や。古。來。運。
 用。の。妙。は。一。心。に。存。す。と。の。戒。言。を。以。て。終。身。之。れ。が。討。究。に。怠。る。無。
 き。を。警。告。せ。ら。れ。あ。る。に。於。て。お。や。讀。者。よ。此。戒。言。を。以。て。兵。の。事。や。
 一。心。即。ち。天。稟。に。存。す。學。ぶ。を。要。せ。ず。と。曲。解。す。る。勿。れ。
 一。言。以。て。洗。筆。の。辭。と。す。

局 地 戰 卷 之 三 終大尾

明治四十一年四月十三日印
 明治四十一年三月十五日發

行 刷

局地戰卷之三與附
 正價 金四拾錢

編 輯 人 兼 發 行 人

東京市四谷區本村町十二番地
 安 西 理 三 郎

印 刷 者

東京市京橋區本湊町十三番地
 三 原 松 皆 治 郎

印 刷 所

東京市京橋區本湊町十三番地
 三 原 松 印 刷 所

東京市四谷區本村町十二番地

發 兌 元

軍 事 學 針 指 社

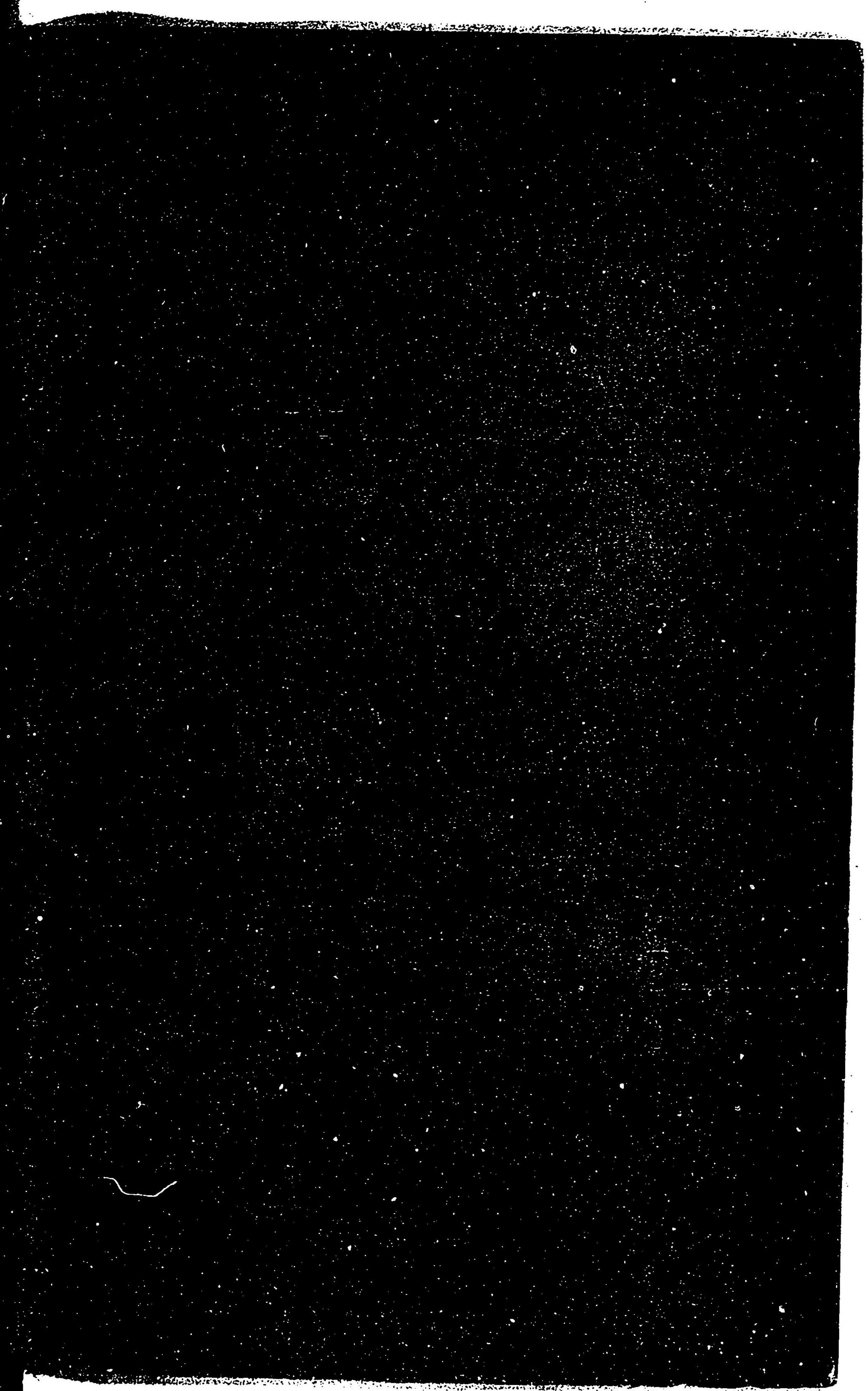
東京市四谷區本村町十二番地

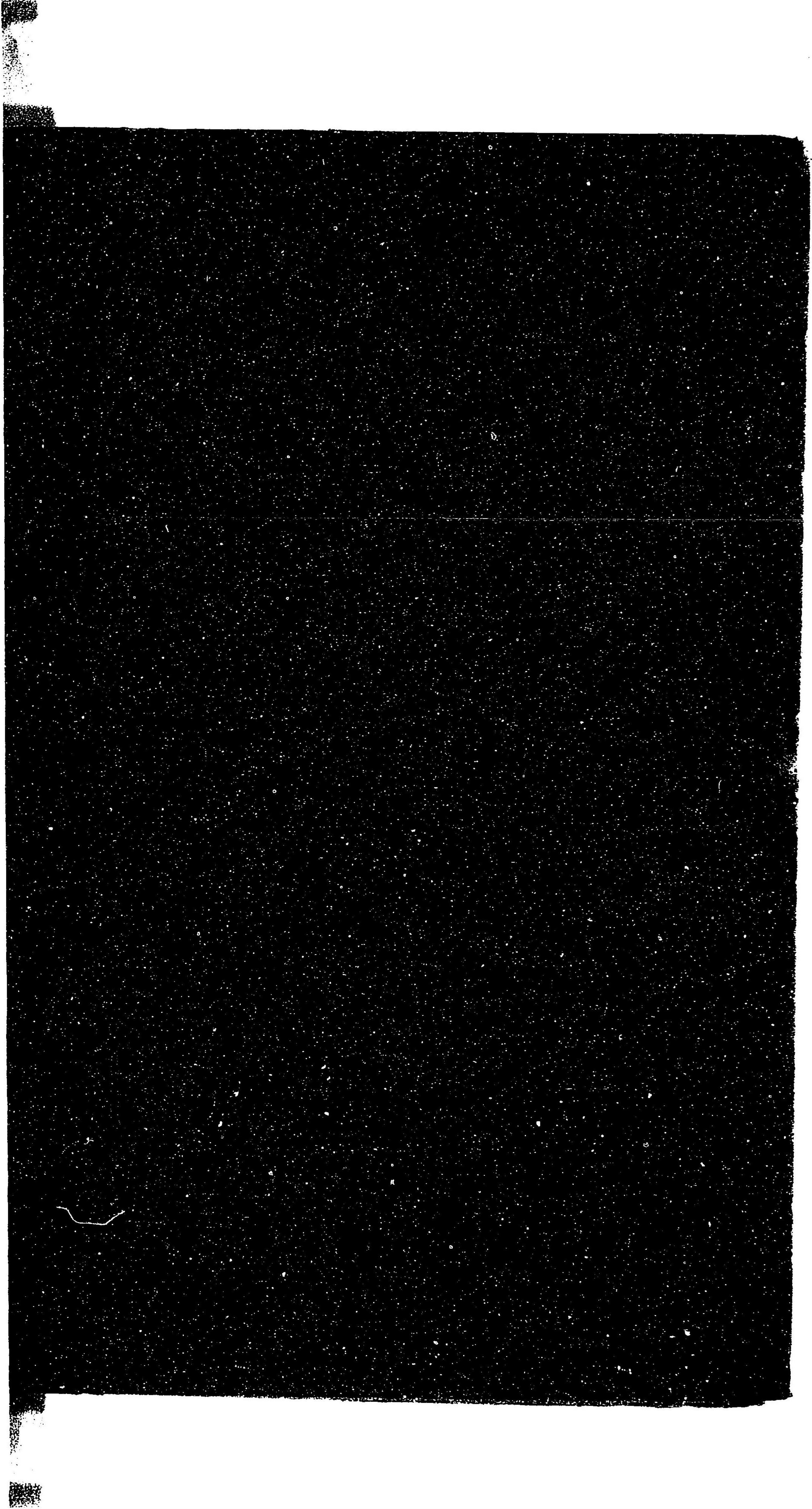
販 賣 所

菊 地 屋 書 店



319
200





051811-000-2

319-200

局地戦 卷1-3

軍事学指針社

M41

BFB-0672



